

君とボクと

律@ひきにーと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

数年前から自分の中で練っていたキャラを動かしたくて書いてみました

稚拙な文ですが読んでもらえると嬉しいです

SS、SSS方式なのでさくつと読めると思います

箸休め的なものと思ってください

タイトルに注意書きがあるものにはご注意ください

(キスあり、等)

お題はT w i t t e rの創作向けお題b o t様(@u t i s l o v e)から頂いております

【キャラ紹介】

【如月雪那(きさらぎせつな)】

日本人 女性 25歳

一人称?私

身長175cm

髪型?ロングポニーテール

髪の色:水色

目の色?藍色

職業:何でも屋《落葉堂》助手

性格:竹を割ったような真つ直ぐな性格 融通が若干効かない節もある

好きなもの？みたらし団子、刃物全般
嫌いなもの？蜘蛛 タバコ
大切なもの？愛刀の「雪風」
親しい人？セリカ

【セリカ・F・ブランネージュ】

日本人とフランス人のハーフ

女性 25歳

職業？何でも屋 《落葉堂》社長

一人称？僕、ボク

身長176cm

髪型？セミロングヘア

髪の色：黒

目の色？緋色

性格？飄々とした性格で掴みどころのない感じ

好きなもの？雪那、コーヒー、煙草（銘柄は問わない）

苦手なもの？早起き

大切なもの？雪那

親しい人？雪那

目次

【はいそうです好きです】	1
【キスの日】、【嫌いの反対は大好き?】	4
【好き、だからキスしたい】	7
【37。Cの恋人】	10
【きみは眠ってしまった。僕は朝まで起きていようと思う】	13
【いい夫婦の日】	16
【下心ですがかまいませんか?】	20
【ほら、もう、あなたが、足りない】	24
【キス魔だから】(キスあり)	28
【きみが描く滑らかな曲線にひどく欲情、する】	31
【ひやりと愛しい銀色の】	34
【左手はあいてますから、飽きるまで繋いであげますよ。ま、離すつもりないですけど。飽きさせませんし?】	37
【誘っているように見えたので、つい。】	40
【君も僕も相思病】	44
【薬指に愛を灯して】	47
【責任取ってしあわせにする】	52
【うつつら煙草の味がした】(キスあり)	56
【飽きたので口直しを】	59
【そういう目で見ていいですか】	62
【キスのために言葉を捨てて、(キスあり)】	65
【不味くても笑って美味しいなんて絶対言わない】	68
【今なら素直に好きといえる】	72
【キスも上手くなったから】	75

【無意識のゼロセンチ】【眠る前にはキスをして】	78
【一緒にいたいだけです、他に理由がありますか】	82
【ギュッて抱き締められるのがいちばんスキ】	85
【デレ待ちなう】	88
【きみの寝顔におはようを】	92
いい夫婦の日	94
ボクは多分、奇跡を期待していた	98
キスの日 2019ver	101
恋人の日	104
気の済むまでキスして	107

【はいそうですね好きです】

いつもと変わらない昼下がりに

お互いリビングでくつろいでいる最中に雪那がおもむろに言った
「なあセリカ」

「なんです雪那？デートのお誘いならダメですよ 今日の家でくつろぐと言ったのは貴女なんですから」

「いや、そうじゃなくてだな。少し見てもらいたいものがあった」
見てもらいたいものがある

雪那がそんなことを言うのはとても珍しい

セリカは聞き返した

「あーそれは僕が興味ありそうなものですか？」

「あると思うぞ……多分」

ちよつと自信なさげに雪那が答える

実際問題こういう時に自分が興味無いものを見せられてもあまりうまく反応できないものだ

以前も新しい包丁を買った、すごく良く切れるし刃が非常に美しいのだと刃物フェチ？の雪那らしい喜び方をされ、それに共感を求められるのはセリカ的には少々、いやかなりキツかった

なので今回はあらかじめ予防線を張っておいたのだ

「ちよつと待っている。すぐ用意してくる」

そういうと雪那は寝室へと引っ込んでしまった

セリカは仕方が無いので待つことにしたのだった
く十数分後く

「出来たぞ 入ってこい」

少し脳内で今夜はどう雪那と過ごそうか、などと考えていたらあつという間に時が経っていた

雪那からの呼び声に現実に戻されたセリカははつとなり、寝室へと足を伸ばした

ドアを開け、中に入るとそこには

「どうだ……？浴衣を新調したんだ」

浴衣姿の雪那がいた

着ている浴衣は白を基調にしたもので蝶の模様が黒で描かれていた

雪那らしい落ち着いたイメージのものになっている

「好きだろうか？浴衣はお前にウケがいいからな」

「はいそうです好きです大好きです」

もちろんセリカは即答した

普段から古き良き大和撫子を体現したような雪那には浴衣が本当に似合うのだとセリカは思っている

実際浴衣はよく似合っていた

浴衣に着られることなく見事に着こなしている

落ち着いた浴衣のイメージとクールな雪那の組み合わせは実によく合っている

その姿をよく目に焼き付けようとじつくりと眺めていると、雪那が少し口ごもりながら

「ただな、問題がある」

と言ってきた

問題とは何だろうか

セリカは聞き返した

「問題とは？」

すると雪那は恥ずかしそうに、

「脱げないんだ、自分一人だと」

とだけ言った

「いつもお前が脱がすだろう。だから私は自分での脱ぎ方などとうに忘れてしまっただな、その」

「みなまで言わないでくださいよ」

そういうとセリカは雪那を実にスムーズな動作でベッドに押し倒した

余程勇気を出したのだろう

よく見れば恥ずかしさからだろうか、雪那の耳は真っ赤に染まっており頬もそれに準じている

そもそも浴衣を見せるなら今でなくてもいい

それこそ夕暮れ時に着て見せればいいだけのことだ

要は不器用な雪那なりの構って欲しいというアピールだったのだ

セリカとしてはそれを無下にするわけにはいかない

さて、どうしてくれようか……と考えるセリカの耳元で雪那がこう

言った

「こういうのが好きなんだろう?」

セリカは勿論、と頷き

「はいそうです好きです 貴女のことか」

End

【キスの日】、【嫌いの反対は大好き?】

【キスの日】

「きよーうは何の日だか知ってますうー?」

「絡むな。なんだ」

セリカと雪那は珍しく酒を飲んでいた

普段はセリカが下戸なためあまり一緒に飲むことは無いのだが今日はセリカが旨い日本酒を仕入れてきたとの事で二人で飲むことにしたのだ

そして1合2合と開けて3合目でセリカがついに酔っ払った

2合目で止めさせておけばよかった……と反省する雪那にセリカが続けていう

「きよーはキスの日らしいですよおー キスの日ー」

「どこからそういう情報を仕入れてくるんだ……」

「えすえぬえすとかだとじよーしきですよじよーしき」

セリカの呂律が回らなくなってきた

これは完全に酔いが回ったか

「だからー今日はぼくにちゅーしないとダメですよおー」

楽しそうにケラケラと笑うセリカ

そんな姿を見ていたら少し雪那の心に黒いものが出てきた

これは

「そうか……なら」

セリカの顎をつかみ、半ば無理やり自分の方に向かせると、セリカと見つめ合う形になった

きよとんとした表情で見つめ返してくるセリカ

「せつな……?」

そうこれは、悪戯心だ

「たまには私からしてやる」

「せつ……んっ」

雪那はセリカの唇に口付けると、惚けているその唇を舌で開けさせ口内へと侵入する

先程まで飲んでいた酒の味がする

それと、セリカ特有の甘い唾液の味

それらが混じりあって、なんとも言い難い濃厚な味わいがした

「んっ……んふ……ちゅっ……んんっ」

前歯を舌でゆつくりとなぞり、そのまま舌が届く範囲で奥を目指す

そして舌を絡め合い、吸ったり、軽く噛んだり

様々な手段でアプローチをかける

「はぁ……んぁ……んんん……ちゅ」

その一挙動一挙動にセリカが反応して喘ぐ、がそれすらも許さない

ように責め手を緩めない雪那

どれほどそうしていただろうか

不意に雪那の方から唇を離れた

「ふぁ……せつ、な？」

「少しは酔いが覚めたか馬鹿者」

雪那はそうぶっきらぼうに言う。とセリカの頬にそっと触れ

「まだ酔いが覚めないなら、付き合ってやらんでもない」

そういうと、雪那は再びセリカに口付けるのだった

end

【嫌いの反対は大好き？】

「なぁセリカ」

「なんです雪那」

「お前は私を嫌いだと思ったことはないのか？」

いきなりな質問だった

正直セリカは反応に困った

「いきなりそんな事を言われても……ボクが雪那を嫌いになることなんて過去未来現在全てにおいてありえませんかよ」

「なるほどそうか……」

雪那は何故か少し満足げに頷いていた

一体何の意図があつての質問なのだろうか

「また何か変なものでも読みましたか？」

こういう場合雪那の情報源は大抵ゴシップ誌等だ

普段真面目で硬い性格なのに何故か新聞よりそういった雑誌の方をよく読むのだ彼女は

今回は一体どんなことを吹き込まれたのか、と確認のために聞いてみると

「いや、な。相手をずっと好きだと思い続けることはありえないんだ
そうだ」

「ふむふむ」

「どこかで一度や二度は相手を嫌いになってガス抜きをするそうだ」

とんだ話だ

「だからお前もそうなのかと思ったのだが……お前はどこでガス抜き
をしているんだ？」

「ガス抜きなんか必要ないくら位に貴女を愛しているのに心外です
ね」

「そういうことを素面で言える辺りが信用ならないんだ」

いつもの調子で答えるセリカに軽くため息を吐く雪那

いつもこんな調子で話をはぐらかされるのだ

「嫌いの逆って大好きなんですよ。負のメーターも吹っ切れば正に
なりますし方向が180度変われば意味も変わります」

なるほど。的確な意見だ

だがそれとこれとは話が別だ、と雪那が言おうとすると

「あんまり意地悪すると、夜に意地悪し返しますよ？」

と、ニコニコと返され雪那は何も言えなくなってしまうのだった

end

【好き、だからキスしたい】

「ねえ雪那」

一日の業務を終え、やっと一息ついた

そんな感じで2人でソファでコーヒーを飲んでいた時、セリカが声をかけた

雪那は飲みかけのコーヒーをテーブルに置くと、少し面倒くさそうに、なんだ、と聞き返す

こういう時のセリカの言う言葉は大体面倒くさいものと相場が決まっていたからだ

「キスしていいですか？」

やっぱり（雪那的に）面倒くさいものだった

よりによってこの疲れてる時になんだと雪那は思った

「いやだって一日お仕事頑張りましたしーその分雪那分が足りないというか」

「なんだそのワケのわからない成分は。私を栄養源にするな」

疲れてるからだろうか、セリカがワケのわからない事を言い出した

「えー……実際栄養貰ってるようなものでしょう。雪那が仕事でいない時の僕なんて栄養足りなくて本当ぐんにやりしてますよ」

「そのまま萎びていけばいいのにな」

「軽く酷い事言われてません？」

まあセリカが萎びるか萎びないかは別として

「なんでキスなんだ」

「人間は栄養を口から補給するものです。つまり雪那分を補給するにはマウスツーマウスしかないということですよ」

何故かキリツとした顔で言い切るセリカ

本当に疲れているのだろうか もしかしたらコイツ余力あるんじゃないだろうか……と疑いにかかる雪那

そんな雪那の気持ちを知ってか知らずか雪那の肩にしなだれ掛かるように寄りかかってくるセリカ

「ほらー早くしないと僕萎びちゃいますよ?」

「萎びればいいだろう」

「嫁から愛を感じられませーん……」

「誰が嫁だ誰が」

そこでふと思いついたことがあるので雪那は聞いてみることにした

「そもそもお前、そんなにキスが好きなのか?」

日頃暮らしている時にいつも何かしらのことでキスを求められる

おはようのキス、いつてらっしやいのキス、ただいまのキス、夜寝る前のキス、e t c. e t c.

とにかくことある事にキスしている気がする

そんなにキスばかりして嫌にならないのか……雪那自身は嫌ではないというかまんざらではないと言った感じだが、と考えた自分が嫌になり頭を降ってその思考を振り払う

「そりゃあ雪那が好きですからキスしたくなりますよ」

「またそういうことを素面で言う」

「本気ですよ?」

じつとこちらを見つめてくるセリカ

その緋色の深い瞳に吸い込まれそうな錯覚を覚える

「だからってキスしてはやらんぞ」

「えー……じゃあ実力行使で」

そう言うときセリカはガバツと雪那を一気に押し倒してその身に覆い被さる

こういう時の身のこなしは上手いのだセリカは

知らぬ間に両手まで押さえつけられていて逃げようがない

真上からまっすぐに見つめられる、目を逸らすことすら許されない感じがした

しようがない、と雪那は一息嘆息すると

「好きにしろ」

「はい、好きにします」

どうやら残業の方が長くなりそうだ、と思った雪那の唇にセリカが

重
な
っ
た
E
n
d

【37。Cの恋人】

雪那が、風邪を、ひきました

「大丈夫ですか雪那？」

恐る恐る声をかけると雪那は少し熱のこもった声で答えてくる

「大丈夫では、無いな。まさか私が風邪をひくとは少々油断が過ぎたか」

「というより最近の気候のせいでしょうね。暑かったり寒かったりと節操ありませんでしたから」

そう。最近は異常気象とも取れるレベルで寒暖差が起きていた。

前日より5度寒かったり暑かったりという気温が長く続いたのだ。これでは流石に普段から気を付けていても不意なことで体調を崩してしまうだろう。

「そもそも雪那は基礎体温低いんですからちよつとの熱でも大ダメージですなぁ……」

「仕方ないだろう……昔からこうなんだ」

そう、雪那の基礎体温は35.34。C程度。今の体温は37。Cだがそれでも十分すぎる発熱なのだ

「なにか欲しいものとかありますか？して欲しいことでも構いませんが」

流石にこの状態の雪那にいつもの調子でいたずらするわけにもいかず、今回は真面目に看護することを決めたセリカ

「今は欲しいものは無いが……そうだな、少し離れていてくれないか」

雪那はそういうとすこし申し訳なさそうに

「お前にまで移すのは悪い」

と続けた

「分かりました。僕はリビングにいるんで何かあったら呼んでくださいね？」

そう言うと、セリカは寝室から静かに出ていった

それを見た雪那は少し安堵し、それと同時に少し寂しさを覚えた

風邪のせいだろう　心が弱くなっている　そう感じた
思えば何かある度に隣にいたのはセリカだった気がする
そう、どんな時も

だからこそだろうか、こういう時ほど彼女のぬくもりが恋しくなる
自分で追い出しておきながら都合のいい話だとは思うが

「……いかな　今は」

それこそ風邪を移して共倒れではたまったものではない

雪那は寝て体力の回復に務めることにした

一方その頃セリカはというと

「とりあえず1通り薬とかはありますけど、後は風邪をひいた病人に
必要なものって……」

そこでふと思いついた。

それを実行するべく早速キッチンへと向かうセリカ

思えばこうして風邪をひいた雪那を看病するのはものすごく久しぶりだ。普段から病気も怪我也も全くの無縁な雪那だけに

「だからこそこういう時ほど甘えてもらいたいんですけどねえ……」

そんな事を言っている合間に目当てのものが完成した

早速雪那の待つ寝室へと持っていく

「雪那、起きてますか？」

「ああ」

どうやら寝られなかったようだ

雪那は上半身を起こすとコホツと少し咳き込んだ

「暑くてな……うまく寝られん」

「なら丁度いいものがありますよ」

そう言ってセリカが持ってきたのは皿に盛られたすり下ろされた
りんごだった

しかし、ただりんごをすりおろしたのではなくかき氷と混ぜてあ
るというひと手間が加えられた一品だ

仮に呼ぶならりんご氷と言ったところか

「これなら体が冷えるでしょう」

「ああ、すまないな」

そういうとセリカはスプーンでりんご氷をひと掬いし

「はい、口開けてください雪那」

雪那は反抗する体力もないのか少しため息をついた後に素直に口を開けた

セリカに食べさせてもらいりんご氷を口に入れる

口の中にりんごの甘すっぱさと氷の冷たさが広がっていく

素直に美味と思える

「美味しいですか？」

ニコニコと問いかけてくるセリカ

「ああ、だが次は自分で食べられる」

しかしセリカは譲らず

「ダメですよ？病人なんですからもっと甘えないと。それに」

「それに？」

「こういう機会でないと貴女にこんなに世話を焼くことはありませんからね。幸せです」

セリカは心底嬉しそうに笑った

雪那は仕方が無いので今回だけで、とセリカの看病に見を任せることにしたのだった

END

「きみは眠ってしまった。僕は朝まで起きていようと思う」

——眠れない

虫も眠る丑三つ時、といった午前2時過ぎにセリカはベッドで悩んでいた

『事』を済ませたら雪那はさっさと寝てしまった……というより寝落ちてしまったと言う方が正しいかもしれない

思えば今日は雪那に朝からやたらと力仕事をさせてしまった

仕事を選べる身分では無いが受ける仕事の裁量くらいはしっかりしなければなと反省した

その疲れもあるのか雪那はぐつすり夢中である

そもそも雪那は寝付きが良い方で寝る気になればどこでもすぐに寝れる方だ セリカはどちらかという慣れた枕とベッドでないと寝られないタイプだ

なのでたまにこういう不眠じみた事が起きると手持ち無沙汰になってしまうのだ

明日の仕事の再確認でもするか……と、ベッドから抜け出そうと思うと何かが自分のパジャマに引つかかっていることに気がつく

雪那の手である

普段はあんなに気丈に振舞っている彼女でも何かに掴まっていないと安心して寝れないのか……そう思うとなんだか可笑しくなってきたセリカはフッフ、と小さく笑った

とりあえず、とセリカは雪那の指を一本一本丁寧に解いていく
起こさないように慎重にだ

それが終わるとセリカはゆっくりと寝室を出てリビングへと向かう

あくまでも雪那を起こさないように静かにだ

……

とりあえずコーヒーを煎れてきた

本当は味なんか分からないけどとりあえず飲む時は濃いめの火傷しそうなくらいに熱いブラックとセリカは決めている

テレビをつけてみるもこの時間にやっているのはつまらない三文芝居にも劣るバラエティーばかりだ

見ていてもつまらないので早々に電源を落とした

秋の夜長、とはよく言ったもので実際夜明けまでがとても長く感じる

こんなに長いと考え事等をするにはうってつけである、とセリカは思った

ふと思い返してみればここ数年で色々あったものだ

本家に嫌気が差して逃げ出し、逃げた先で連れ戻しに来た追手である幼なじみの雪那に再会し、二人で逃げる事を選び、そのまま自分たちを知らない土地に逃げ込みそのままその地で便利屋を開き、それもそこそこ食うに困らない程度には繁盛し、今に至る

雪那が追ってきた時は本当に困ったものだ

何しろ如月家は水無月家に仕える一族だ

その命に逆らうのは何よりも重い罪

だけど自分達は家に縛られるよりも自由に生きることが望んだ

だからセリカと雪那はこうして一緒にいる

本当にしがらみを抜けられたのかどうかは分からないけど、こうして二人で静かに暮らせるのなら

こうして何にも縛られることなく自由に生きられるのなら

家を出て良かったと、心から思う

そんなことを考えていながらコーヒーを継ぎ足し継ぎ足し飲んでいたら時刻はもう5時を過ぎていた

セリカはこのまま、起きていようと思った

.....

「おはよう……朝弱いお前が早起きしているとはな」

寝室から出てきた雪那はあくびをしながら声をかけてきた

「珍しく早く起きたんですよ……一杯いかがですか？」

すつ、とコーヒーを雪那に勧めるセリカ

その顔は、少しだけ、晴れやかだった
E n d

【いい夫婦の日】

【いい夫婦の日】

今日は11月22日

俗に言う『いい夫婦の日』である

ではそんな日に我らがセリ雪が何をしているのかをご覧いただく

——場所は某所、居酒屋一本木

仕事が早めに終わったセリカと雪那は『せっかくだから少しだけ飲んでいこう』という雪那の提案をセリカが断れずに付き合う形となつてこの店にやってきていた

今日は引越しの手伝いを請け負った為体はすっかり疲れ切つていた

が、そういう時ほど飲む酒は美味く感じる……というのが雪那の持論である

なので入って早々駆け付け三杯と言わんばかりに雪那は日本酒を徳利で3本開けていた

これでも酔わないのだから本当にザルと言つた方がいいのかもしれない

対するセリカはあまり酒は得意ではない（飲めない訳では無いがすぐに酩酊してしまうため避けている）のでウーロン茶で雪那に付き合っていた

万が一二人とも酔ったら帰りが大変になるだろうという考えがあつて……なのだが

「お前はずつと茶ばかりだな。つまらなくないのか？」

「雪那が飲んでる姿を見てるだけでも充分飲んでる気分を味わえてますよ」

と、時たま酒を勧めてくるので上手くそれをかわしていかなければならないのが面倒ではあつた

「しかしまあ2人がこの町に来てからもう何年だろうねえ 早いもん

だよ」

と、言ってきたのはこの店の女将である

名は名瀬 文代（なぜ ふみよ）

まだ齡30弱といったところなのに1人でこの居酒屋を切り盛りする敏腕女将である

そもそもこの居酒屋はこの町でも数少ない飲み屋でそこそこ繁盛しているとのこと

雪那とセリカは時たま夕食を食べたり飲みに来たりしている

「まあな……気がつけば早いものだ」

「最初は何でも屋を開く！なんて言われて皆ビックリしたもんだよ
今じゃアンタ達無しじゃ生活が回らないくらいこの町の一部になっちまってるしねえ」

「それは恐縮です……あ、文代さん。アボカドの漬けください……ほら雪那も何か食べて。ツマミ無しで飲んだら体に悪いっていつも言ってるでしょう」

雪那は癖なのかツマミがなくてもどんどん酒を飲む

それが原因で翌日二日酔いにもなったりするのでセリカは気を回しているわけだ

「あいよ……ああそうだ。今日は何の日だか知ってるかい？」

「今日、ですか？」

大したことが思いつかないセリカにふふふーと文代は笑って

「今日は11月22日、いい夫婦の日だってさ『お二人さん』」

と悪戯っぽく言ってきた

「なっ!! 私たちはだな! 夫婦とかではなく!」

と雪那が反発すると

「いやー僕としては夫婦と呼ばれるのは満更じゃないというか……この場合どつちが奥さんなんでしょうね?」

とセリカが茶化す

やはりこの2人

根本からしていいコンビなのである

「まあボクとしては雪那がお嫁さんの方が……」

「何を言うか。お前の方がよっぽど女らしいだろう」

「それはまあ……認めますけどね」

確かに女らしさ、という点ではセリカに軍配が上がってしまった

元より根が真っ直ぐな雪那は男よりも男らしくなってしまうてる感が強い

逆にセリカは元より『家』では誰よりも美しく気高く女らしく生きろと育てられた為、一人称こそ『ボク』でありながらその立ち振る舞いは誰よりも女らしく見える

「じゃあ雪那ちゃんが旦那でセリカちゃんが奥さんかあ……いいじゃないの仲良しで。はーあ、アタシも旦那さん欲しいなあー」

「昔居たんじゃありませんか」

「あんな旦那のうちに入らないって……はい、漬けアボカドお待ち」
すい、と二人の前に漬けアボカドが差し出される

色艶ともに良い漬かり具合なのが見て取れる

さっそく2人は箸を取った

「いただきます」

「いただきますーす……やっぱりここの漬けアボカドは最高ですねえ……」

……………

その後2人はある程度飲み食いして店を出た

その帰路のことである

ふと、セリカが歩みを止めた

「雪那」

「なんだセリカ」

「ボク、貴女に会えて良かったです」

急になんだ、と雪那が言うと

ちよつとね、とセリカは笑い

「あの日、あの時貴女に会って、あの日、あの時貴女に再会して、ボクはずっと幸せでしたよ」

「まるで、もう終わりみたいな言い方だな？」

そう、雪那が言うとセリカはまた笑って

「いいえ、これからも続くんです ずっと、ずっと！」

と、今日一番の笑顔を見せた

雪那はそれを見て、どこか満足そうに頷き

「そうだな」

とだけ返し、セリカの手を握ると再び歩き出したのだった

End

「下心ですがかまいませんか？」

季節は冬、時間は夜

この時期の体の芯から冷える寒さとしん、と張り詰めた空気が雪那は好きだった

こんな日にはこれでもかと言うほど暑い湯に浸かってゆっくりと考え事をしたりするのがいつもの風呂時の過ごし方……

だったのだが

「いやー熱すぎますよこれ 玉の肌が火傷しちゃいます」

今日はセリカが一緒だった

「どうしてこうなった……」

「どうしてってそりゃあ」

時間は少し巻き戻る

夕食を食べた後、2人で洗い物をしていた時だった

「雪那」

「なんだ？」

「今日は一緒にお風呂に入りましょう」

唐突な一言だった

まあ恋人同士ならこれくらい普通だろう

何もおかしいことは無い

だが問題はセリカがある事情を抱えていたことだ

「お前……あんまり人前で肌を見せたくないって言っていただろう」

そうなのだ

セリカは基本的に人に肌を見せたがらない

理由は過去に『家』でセリカに対して行われた生々しい虐待痕を見られたくないから……というものだった

なので基本的にセリカと雪那は風呂は今までは別々に入っていた、のだが

「ほら、今度悠里ちゃん達と温泉宿に行く予定じゃないですか」

悠里というのはセリカたちが良く行く和風甘味『白玉庵（しらたまあん）』の看板娘深海悠里（ふかみ ゆうり）という少女のことである

そうセリカ達はせっかくだから年末は温泉宿に泊まってゆっくりしようではないかと悠里達と旅行の計画を立てていたのだがそこで問題に行き当たる

温泉宿に行くということは皆で温泉に入るということだ

当然セリカは虐待痕を人に晒すことになってしまう

幸いにも今ではほとんどの傷が消えかけているが背中に付けられた鞭の痕などはなかなか消えてはくれなかった

そこでセリカが思いついたのが

「ならいつそ見せてしまえばいいと思ひまして　それですは雪那で予行演習を」

「私は練習台か」

「やっぱり近い人から見せていけば慣れると思ひまして」

その時僅かにセリカの頬が緩むのを雪那は見逃さなかった

「お前、よからぬことも考えているだろう」

「まあ7割方下心からですけど構いませんよね？」

ヘラヘラと言つてのけるセリカ

まあセリカのことだからそんな所か……と思ひがちだが、それはセリカなりの強がりだと言う事も雪那は見抜いていた

セリカはセリカなりに自分の過去と向き合おうと考えているのだ

今言つた言葉はさ気を使わせないためだろう

何年経つても、それこそ『子供の頃から』セリカはそういう所だけは変わらないままで

なので雪那は『いつも通り』気づかないふりをして応えた

「仕方ない……付き合つてやる」

「やった♪じゃあ僕お風呂の用意してきますね」

———そうして今に至る

今はお互いに1通り髪と体を洗い終え2人でゆつくりと湯船に浸かっているところだった

「それで、どうなんだ」

「見られること、ですか？まあ思っていたよりもあんまり怖くはないですね」

それは良かった、と雪那は言うと同時に少し気が楽になったのを感じた

実際傷は鞭の痕などが若干遺る背中以外はほとんど気にならないレベルだった

というより雪那はすこしどぎまぎしていた

普段は『事』の時でさえはつきりと見ることの出来ないセリカの柔肌

白く白く上絹のような色をした肌は湯に浸かってほんのり桜色に染まっている

スラリと伸びた女らしい柔らかそうな手足

剣を振るうために力を付けた雪那にはない美しさを持った手足だ

普段見慣れていないだけにこういう時に見てしまうと予想以上に破壊力がある……と考え頭を振ってその考えを払拭する

これでは下心があるのは自分の方ではないか

そうもややもやしているとセリカがふと自分を覗き込んでくる

「雪那？顔、赤いですよ？」

「いや、なんでも……」

覗き込んでくるセリカを見てふと視点が三寸ばかり下に行く

そこに映る桜色の肌の中でもひとときわ映える桃色の……

「——セリカ」

「なんです？」

何も分かっていないセリカに対して雪那は少し罪悪感を感じながら

「私は、先にかかるぞ……」

「あ、のぼせちゃいました？こんなに熱いお湯ですもんねえ」

「あ、ああ……」

我ながら苦しい言い訳だ……と思いつつもセリカが気付いていないことに神に感謝した

「じゃあ僕はもう少し浸かってから上がりますね」

そうするといい、と雪那は言う就先に湯船を出て脱衣所に向かっていった

「……いくじなし」

セリカが誰にいうでなく、ぼそつと呟いた

End

「ほら、もう、あなたが、足りない」

「はあ……」

事務所の机で突っ伏しながらセリカはため息をついていた
今日は雪那は高校の剣道部の稽古をつけに出掛けてしまっていた
いつもなら迷わず雪那に付いていくセリカなのだが今回は来客予定がある、と言うことでセリカは事務所に残っていたのだ
その来客も突如来れなくなった、と先ほど連絡が入り結局セリカは置いてきぼりを食らっただけということになってしまった

「はあ……」

今からでも会いに行こうか

しかし自分は武術には詳しくないので結局は邪魔でしかないのだ
雪那と共にありたいとは願っても彼女の邪魔になるようなことはセリカも望んでいなかった

なので結局こうして事務所の机にため息を吐きかけるだけの作業をしていたのだ

「……いけませんね こうも気が滅入ってしまったては仕事も手につきません」

そう言えば目を通さなくてはならない書類がここに……
以前受けた依頼人から再度の依頼もあったような……
等等やることは沢山あるのにさっぱり手に付く様子はなかった
ただひたすら雪那のことが頭をめぐる

そんな感じだった

「あー……本当ダメですね ちょっと気分転換しましょうか」

そういうとセリカは席を立つとコーヒーを煎れようとガス代に向かった

……

とりあえず新しく買ってきた種類の豆を使ってみよう

いつものごとく味は分からないのだがまあ、きつと美味しいだろう
正直美味しさもわからないのだが

元々セリカはコーヒーマシンはカッコつけて飲んでる感が強かった

こんなものちよつといい香りがする苦いだけのお湯であるという
のがもつぱらの感想

しかしそれがいつの間にか習慣となっていてすっかり常飲するよ
うになつていたので

考え事をするときも仕事をする時も一杯あると落ち着く

自分にとつてコーヒ―は着火剤のような役割なのかもしれない、と
思っているとお湯が湧く

慣れた手つきでフィルターに粉を煎れお湯を注ぐ

香ばしいなんとも言えない芳醇な香りが部屋を包み込む

じつくりと抽出されていくコーヒ―をひとまず放置し茶菓子でも
ないかと適当に戸棚を漁ってみる

来客用のクッキーがあつた

まあ、どうせ今日来ていたら出していたものなのだ

客の腹に消えるか自分の腹に消えるかの違いしかない、とセリカは
割り切つて何枚か小皿に盛り付ける

なんだか少し悪いことをしているような気分だな、と思うとどこか
おかしくなつてきてついふふと笑つてしまった

そうこうしている間にコーヒ―が出来上がったようだ

コーヒ―とクッキーを手にセリカは机へ戻つていった

……

雪那が居ないと羨びてしまう

そう表現したことがあつたが間違つてはいないな、と思った

書類をある程度処理したところでセリカは一息ついた

いつも仕事している時は雪那が近くににいるからハリが出ているの
であつて雪那がいなければこんなにもやる気が落ちるものなのかと

雪那に相当依存してしまつている証拠だ

依存自体は悪い事ではない

ただそれが自分を腐らせてしまうのならそれはよくない依存の仕
方なのだということも分かつていた

だけどころ、雪那が側にいないだけで自分の孤独さを痛感すること
になるのだ

確かにこの街にやって来てから早くも数年が経った

親しい仲の友人もお互いに増えただろう

それでも雪那ほど心を許せる人というのは一人もいないのだ

雪那には自分をすべて晒している

過去も今も未来も

全てを雪那に見せている

それは雪那も同じだ

雪那も自分を信じてここまで付いてきてくれた

だからこそお互いが常に近くにすぎたせいで離れてしまうところ
んなにも、相手を求めてしまおうのだと

セリカは初々しい生娘のようだ、と思った

しかしそれならそれでもいいではないか

お互いを求め合うなら求め合えばいい

私達はそういう道を選んだのだから、と

そう言えば御婆様相手に啖呵を切った時もそんなことを言ったな

……と思っていたら、不意に事務所のドアが空いた

「帰ったぞ」

雪那だった

時計を見るに帰る時間には少し早いと思うのだが

「予想より早く終わってな 帰り際茶会に誘われたが断ってきた」

「あら勿体ない ゆっくりしてくればいいじゃないですか」

そうセリカが言うとき雪那はふつと笑い

「どこかの寂しがり屋が泣いているかもしれないからな」

と、何もかもお見通しのような笑顔をセリカに向けてきた

「ボクはそんなに子供じゃありませんよ」

「どうだか」

「……敵いませんね雪那には」

そういうときセリカは席を立ち、雪那の方へ歩み寄ると

「寂しかったですよ、雪那」

「素直でいいことだ」

ぎゅっと、優しく抱きついた

E
n
d

【キス魔だから】（キスあり）

「キス禁止だ」

「はあ？」

急に何を言い出すのかこの人は

そう思ったセリカはとりあえず聞き返すことにした

「唐突になんです？」

「普段からキスし過ぎなんだ」

「そりゃあまあ貴女となら幾らでもキスしたいですよ」

「そういうことじゃない！」

のらりくらりと言葉巧みに正当化しようとするセリカに雪那は怒る

「ボクとキスするのが嫌なんですか……？」

哀しそうな目をして雪那を見つめるセリカ

そんなセリカを見た雪那は罪悪感を感じながらもそれを頭を振ってそれを必死に振り払い

「口唇ヘルペス……とやらになっただんだ」

「口唇ヘルペス……ああ、言われてみれば」

セリカは雪那の顎を持ちくいっと持ち上げるとその顔をのぞき込む

すると雪那の唇の端が赤くなっているのを見つけた

「あー……なってますね 確かに」

のぞき込まれた雪那は恥ずかしくなってその手を振り払う

「だから、当分キスは禁止だ」

「あー……うつつちやいますもんね」

そうなる

「えーつと、エッチも禁止とか」

「当然だ」

ですよねー、とがつくりとするセリカ

まあ『そういうこと』をしてしまえば当然の様にキスしてしまうので当たり前ではあるが

「禁止つてどれくらいですか……？」

「一応医者に行くが恐らく1週間程だろうな」

「1週間も雪那とキスできないなんて……」

まるで世界の終わりが来たかのような顔をするセリカ
よくよく考えると本当にいつもことあることにキスしている気が
する

起きてすぐ、出かける前、帰ってきてから、寝る前に

……本当にことあることにキスしていた

まるで新婚夫婦のようだな、と思い少し恥ずかしくなった

「……とにかく治るまでキスは禁止だ」

「分かりました……仕方ないですね」

そうしてセリカは1週間の禁欲生活？に挑むことになってしまっ
たのだった

そしてその1週間なのだが、セリカは意外にも変に雪那に手を出し
たりなどしないで過ごした

セリカはこういう所はしっかりしていて、1度ダメと言われれば本
当に手を出してこないのだ

しかしその態度に、雪那は何故か寂しさを感じていたのだった

——そして1週間後

「治りました？雪那」

「うむ、医者が言うにはもう完治したそうだ」

雪那が医者から帰ってきて、まっさきにセリカはそれを聞いてきた
まあ1週間我慢していたのだから当然か……という雪那の考え
だったが

「それは良かったです」

と、労いの言葉をかけられただけで何も無かった
何も無かったのである

1週間も禁欲していたセリカが何もしてこなかったのである
そんな馬鹿な……と思うかもしれないが本当に何もしてこなかっ

た

何もしてこなかったのである

そんなこんなで夕食も食べ、風呂にも入り、あとは寝るだけとなったが……

セリカは一切手を出してこなかった

「じゃあ、おやすみなさい雪那」

「ああ、おやすみ」

結局今日は何もしてこなかったな……と、少し淋しさを感じていた
ら

「と、思いました?」

突然セリカが覆いかぶさってきた

「1週間おあずけされて寂しかったのは雪那もでしょうか?」

凶星だった

いつもしているスキンシップが無くなるということはそれはとても寂しいことなのだ

そういうことをこの1週間で思い知ったのは他でも無い雪那の方だったのだ

そしてセリカはそれを分かっていたのだ

その上であえて焦らしていたのだ

恋の駆け引きではセリカの方が何枚も上だったということだった

「……お前には敵わないよ」

「押し引いたは恋の楽しみですから」

ふふふ、と嬉しそうに笑うセリカ

その顔はこの1週間の鬱憤が溜まりに溜まっている、という顔もしていた

恐らく自分はこの1週間の鬱憤をぶつけられてしまうのだろう、文字通り

そう考えた雪那は

「なら私は……」

先にセリカの唇に唇を重ね、先手を取ることにした

End

【きみが描く滑らかな曲線にひどく欲情、する】

時間は3時

おやつ時、お茶の時間、一息入れる時間など言い方は様々
そんなこんなでセリカと雪那も一旦休憩してお茶でも入れようか
としていた

「そう言えば今日はこれがあったな」

そう言つて雪那が冷蔵庫から出してきたのは小さな包装に一つ
入っていて、そのビニール袋の包装にこう書いてあつた

『生クリームたっぷり、生クリームきなこわらび餅』!!

名前を見てわかるだろう 俗に言うコンビニスイーツというもの
だ

最近の雪那はコンビニスイーツの和菓子にお熱だつたりする
新商品が毎月何か出るので楽しいのだそう

それでも和菓子が出来るのは珍しいので今回は喜び勇んでこれを
買つてきた次第であつた

ただ一つ問題が

「……雪那、洋菓子系嫌いですよ？生クリームはいいんですか？」

「ま、まあ和菓子に合わせた甘さになつてるかもしれないしな」

あはは、と笑つてごまかす雪那
そうなのだ

雪那は洋菓子が苦手なのだ

本人曰く「甘さに品がなく雑味が多い」とのことらしいのだがセリ
カには全く理解出来なかつた

まあ、腹に入れば同じ

和菓子がメインなら味覚の多少の食い違いは気にしないのだろう
というわけで雪那好みの玉露の緑茶を入れていぎ実食……となつ
たがここで問題が

クリームが、こぼれるのである

一口で食べるには少々大きいので二口ほどに分けて食べるのだが
その際にクリームが手にこぼれる

生クリームたっぷり!!と銘を打っているのには間違いはないよう
で二人そろって初っ端から盛大にクリームをこぼしてしまったのだ
とりあえずセリカは何か拭くものを、と流し台に布巾を取りに行っ
た

そこで残された雪那は思った

このクリーム意外と悪くない

わらび餅の涼しさと合うように少し甘みを抑えて作られたきめの
細かいこの生クリームは単体で食べてもきつと美味しいのだろう

和菓子屋と違って手作りではないにしろ、それなりに作る人の手間
がかかっているものだろう

それがこのまま食べられずに拭き取られてしまうのにはあまりに
勿体ないと

そんな考えが頭の中をぐるぐると巡る

そこで雪那が至った発想は

「……何やってるんです」

「あ……いや、これは、だな」

セリカが流しから戻った時目に映ったのは自身の手をさも美味そ
うに舐めている雪那の姿だった

どうやら勿体ないと思ったらしくそのまま手を舐めてクリームを
舐めとっていた様子である

その様子は子供のようでもあり、雪那の細く白い指先が白いクリー
ムで彩られて、それを舐めとる赤い舌がなんとも淫靡に見え、セリカ
は正直ムラつときた

「意外と子供っぽいところありますよね、雪那って」

「うるさい……あーもう、拭くからそれをよこせ」

そう言った雪那の指に少しクリームが残っているのを目ざとく発
見したセリカ

「——勿体ない」

「は………うっておいー!」

流れるような至って自然な動作で雪那の指を啜えるセリカ

そのまま指にわずかに残っていたクリームを舐めとる

しかし、それだけでは足りずに指に舌を這わせる
ゆつくりと、指の関節一つ一つをなぞるように、丹念に舌を這わせ
ていく

啜えて、吸って、舐めて、しゃぶって、じつくりと雪那の指を味わ
う

「ふ……っうあ」

「ん……ちゅ……はあ……」

もうクリームはなくなっているのに、僅かに甘さを感じるのはなぜ
だろうか

女の子は砂糖とかお菓子とかその他素敵なもので出来ている、とい
う話があったような

ならきつと雪那は白無垢の砂糖菓子なのだろう……と考えていた
ところで無理矢理指を引き抜かれた

「何を……やってるー！」

「何って指フェ」

「言わんでいい!!」

顔が真っ赤な雪那と、いたっていつも通りの飄々とした態度のセリ
カという構図が対照的だ

「だって雪那がクリーム舐めてるところにムラッと来ちゃいまして」

「事務所だぞ！場所を考えろ！」

「事務所じゃなければいいんですか？」

そういうと雪那はうつ、とたじろぎ

「とにかく、場所は弁えろ！」

というとセリカから布巾をひったくり手を拭き始めた

心なしか、セリカが舐めていた部分を重点的に拭いているような

「そういう事されると凹みますけど……」

「うるさい」

お前の唾液がついてると考えるだけで指が燃えそうだ、というのは
雪那は口には出すまいと思っただった

End

【ひやりと愛しい銀色の】

「うーん……」

「何悩んでるんですか雪那」

仕事も終わり家でゆっくりしている、そんな時に雑誌とにらめっこしながらうんうん唸る雪那が心配になってセリカは声をかけた

すると雪那ははあ……と溜息を吐いた

なにか悩み事か……と思い雪那の持っている雑誌のページをチラツと見るとこんな文字が目に入った

「高級包丁泉白雅 究極の切れ味をアナタに……」

つまり雪那はおそらく

「これを買うかどうか悩んでいた、と」

「そうなんだ」

雪那は本当に超が付くほどの刃物フェチだ

1日1回必ず愛刀である霊刀『雪風』の手入れは欠かさないし、包丁やナイフは少しでも切れ味が落ちようものなら自身の手で研ぎ上げる

時々刃物を見て悦に浸っている姿をみるとこの人本当アブナイ人なんじゃないだろうか、と思ってしまう時もある

それくらい雪那は刃物類にはご執心で、それを集めるのが彼女の趣味で生きがいと言えるのだが……

「なんで悩んでたんです？いつもならすぐ買っちゃうじゃないですか」

「それが、値段が、な」

どれどれ、と雪那の指さす白雅・桜花折という包丁の値段を見てみると……

「千、万……十九万!?包丁一本にこんな値段するんですか!？」

セリカには全く理解出来ない額だった

包丁なんて切れればいいしそれ単体の価値なんて最低限それなりのものであればいいだろうというものだ

なのだがこの包丁、一本で198000円というべらぼうなお値段

が付いている

説明文を読んでみるとどうやら本物の料理人が使う為のものとして作られるもので、大量生産品の包丁とは違い職人が一本一本手作りしているとのことだ

なるほどそれならこの値段もうなずける、と考えたあたりで大分雪那に毒されてるなと思ったセリカ

「要するにお値段が高くて手が届かない、と」

「うむ、7割は出せるが残りがな……しかもこの包丁は期間限定完全受注生産品なんだ 今を逃したら二度と買えん」

この値段の7割も溜め込んでいたのか……と感心するセリカ

まあ毎月毎月困らない程度にはお小遣いを渡しているのだからう時のために貯めていたのだろう

しかし今回これが出たのは完全に予想外だったようで出費が追いつかない、というわけである

「それにこれは万能包丁だ こういう職人のもので万能包丁が出るのは珍しい」

「ああ、確かに職人さんが作る物ってちゃんと用途が分かれてるものを作りますよね」

「かなりの貴重品だ それを逃すのは……だが金が……」

ふたたびうーんうーんと悩み始める雪那

その姿が面白くてもう少し悩む姿を見ていたい気もしたが、気の毒なのでセリカは助け舟を出すことにした

「なら、残りは僕が出しましょうか」

「いや、それは……」

「ただし！条件があります！」

まあ、タダというわけにはいかないだろうと思った雪那はその条件とやらを聞いてみた

「その包丁でボクに美味しいご飯を作ってください♪」

「そんなことでもいいのか」

何だそんなことか……と思った雪那だったが更に！とセリカが出してきた条件は

「裸エプロンで♪」

「は、裸エプロン?」

こういう事に疎い雪那はつい聞き返してしまった

まあ言葉からどんなものなのかはだいたい想像はついたのでが

そしてそれを聞いて頭の中をぐるぐると考えが巡る

恥ずかしい

しかし包丁は欲しい

しかし恥ずかしい

しかし包丁は――

雪那が下した決断は……

後日

「雪那、届きましたよ」

「本当か!」

セリカの渡してきた荷物を手に取ると早速と封を切る

すると桐の箱に丁寧に納められた包丁が姿を現した

顔が鏡のようにはつきりと映り込むほど磨きあげられた刀身、まる

でそれは銀色の芸術……

そんな素晴らしい逸品にほう……とため息の漏れる雪那

その後ろでセリカはニコニコと笑っていた

「約束、忘れてませんよね?」

ビクツとする雪那

「も、勿論だ」

雪那の羞恥の料理はここから始まるのだった……

End

「左手はあいてますから、飽きるまで繋いであげますよ。ま、離すつもりないですけど。飽きさせませんし？」

「とりあえず今日の夕飯の食材はこれで全部ですね」

「ああ」

今日は二人で仕事帰りにスーパーへ買い物に来ていた

いつもなら食料はまとめて買ってしまふ派の二人なのだが、今日は朝冷蔵庫にたまたま何も無いことに気がついたのでこうして買い足しに来た次第だった

「今日は雪那の当番でしたよね 何作るんですか？」

「最近冷えてきたからな 今日湯豆腐だ」

「湯豆腐ですかー なかなかいいですね」

等と今夜の夕食に関しての雑談をしながらレジへと歩みを進める
2人

その足取りは軽い

今日は緩やかな日だった

仕事も無く依頼人も来なかったのでただ事務所に居ただけで一日が終わっていた

たまにはこんな日もいいだろう、とセリカは思っていた

す流石にこのまま依頼が来ないということはありえないだろうが万一の時は貯金を切り崩せばいいし……という考えだ

実際セリカの口座には使う予定のない預金が唸るほど入っていた

それもこれも「大変だろうから」と、毎月毎月丁寧に仕送りをしてくれるお祖母様のおかげなのだがセリカはあまりそれに甘えるのは良くないと考えていた

なので、極力そのお金には手をつけないうできたのだ

意地というのも若干あったりもするが

仮にも『家』を出た身としてはそれに甘えるのはあまり良くないのではないか、という考えと

お祖母様の言った「好きに生きて好きに生きなさい　その為の手伝いはしてあげる　今までの償いとしてね」

という言葉が頭を巡っていたのだ

まあ、考えすぎてもしょうがない

その時になつてから判断すればいいのだ

それに悩むのは自分らしくない、とセリカは考えるのをやめた

そしてレジに着く

今日は空いているのかすんなりレジを通ることが出来た

いつも通りレジのおばさんに茶化されながら軽く談笑して二人は店を出た

夜になればもうすっかり冬の気候である

身の芯からせり上がってくる寒さと肌を刺すような空気が体にしみる

スーパーからマンションまではそう遠くはないので二人はゆっくりと歩いて帰る

その時なんとなく、雪那の右手が空いていることが気になったセリカは

「お手、空いていますよ」

と、ナチュラルな流れで手を握った

自然すぎて雪那がしばらく繋がれたことに気づかなかつたくらい

「随分あっさり繋いでくるな」

「あ、お嫌でしたか？」

いや、と雪那は言う

「気恥ずかしさで手が出せなくてな」

と、ふふつと笑った

「言ってくればいつでも繋ぎますのに」

「お前みたいに何でも素直に言える性格じゃないんだ」

「知ってます　だからボクがこうして気持ちを汲み取ってあげないと」

と、セリカは言う　と少し手に力を込めてぎゅつと握った

「飽きるまで繋いでましよう　飽きさせるつもりは毛頭ありません

が

「お前といて飽きることなどあるものか」

と、二人で夜道を歩いていくのだった

End

「誘っているように見えたので、つい。」

ある日の休日の昼下がり

セリカと雪那はリビングでまったりとした時間を過ごしていた
今週はちよつと大目に依頼が入って少しドタバタとした1週間
だった

正に西に東にといった具合

なので今日はどこにも出かけずに部屋でお互いゆっくりしようと
決めたのだ

セリカと雪那はソファに座り、お互いに思い思いの時間を共に過
ごしていた

雪那は溜まっていた週刊誌の読破(雪那はゴシップ紙を週に四冊は
読む)

セリカはその隣で買ったものを見ていなかった映画のDVDを観
ていた

それでもお互いにぴったりとくっついたまま離れないのは、もうお
互いの距離感がこの距離で固定されてるからだろうか

何をするにも一緒

一緒に寝て、一緒に起きて、一緒に食事をし、一緒に働き、一緒に
帰り、一緒に風呂に入り、一緒にまた眠る

この距離感に疑問を感じたこともないし不満を抱いたこともお互
いになかった

むしろお互いにこの距離感がとても安心する、と思っていた
自分の愛しい人が側にいるだけでも満たされる心はあるのだ

こうしてお互いに別々の時間を過ごしながらも同じ時間を共有す
ることに幸せを感じていたのだった

とりあえずDVDを1つ見終えて、セリカは一度休憩するか……と
思いプレイヤーの電源をオフにしようとするすると雪那が声をかけてき
た

「ん……観るのをやめるのか」

「まるまる1本観ちゃいましたからねえ 流石にちよつと休憩しよう

かと」

「そうか……先が気になったんだがな」

意外な反応だった

どうやら雪那は雑誌を読みながらDVDを観ていたようだ
観ていたDVDはいわゆる昼ドラというやつで、内容は30代のOLが20代の若い男と職場を通じて恋に落ちていく……というありきたりなものだった 再放送ものでもある

セリカはこういう話は好きというよりはいつも昼時に惰性で見ている今回は仕事で観れなくて抜けた話があったのでレンタルしてきたDVDで補完している感じだった

まあ雪那が先を気にするということはそれなりに惹かれる内容があったということなのだろう

セリカとしては共有の話題が生まれたことが嬉しくなった

「以外ですね、雪那がこういうのに興味示すの 普段は時代劇とかしか観ませんのに」

「横でずつと流れていれば気にもなるさ ……で、続きは観るのか？ 観ないのか？」

そこでちよつと問題が起こる

確かセリカの記憶が正しければこの後の話には一部に一度観たものが混じっていてそのシーンは確か……

「ベッドシーンあるんですけど、いいですか？」

「……構わんよ」

そう、昼ドラにありがちなベッドシーン回が混ざっていたのである
セリカとしては飛ばす気だったのだが、気が変わった

どうせならベッドシーンを見て恥ずかしがる雪那が見たい!!!
!!!

というよこしまな思いが胸を支配していた

鉄は熱いうちに打てとはよくいったもので、セリカは雪那の気が変わらぬ内に……と、休憩はなしに続けてみることにした

.....

問題のシーンに差し掛かった

やはり昼ドラマらしいきらびやかな演出と生々しい音楽とともに
ベッドシーンが演じられる

それを観ていた雪那が、ふとちらつとこちらを見てきていたのをセ
リカは見逃さなかった

すかさずセリカは言う

「雪那」

「なんだ」

「したくなっちゃいました?」

確信を突くセリカの言葉に雪那は顔を真っ赤にしながら否定する

「真っ昼間だぞ! そんなわけないだろう!」

「えー でも雪那の視線から『羨ましいいなー私もセリカとしたい
なー』って無言の要求を感じましたよ」

「感じるな! 無視しろ! というか察しろ! 口に出すな!」

「そうやって恥ずかしがるのが見たかったのがありますし♪」

ぐぬぬ……と恥ずかしがる雪那にセリカはそつと近づいて耳元で
囁く

「あのドラマより激しいのと優しいのどちらがお好みですか?」

その問いかけに雪那は答えなかった

答えの代わりに、セリカの首にゆっくりとその手を回す

「お誘いと見て、いいですよね?」

セリカの言葉に雪那は答えない

ただ視線は合わせないように顔を背けている

セリカは続ける言葉と共に雪那を自分の方に向けさせる

「ちゃんとボクを見て、雪那」

雪那は答えない

「硬い口を割らせるのは得意ですよ？」

その言葉と共に、2つの紅が重なった

End

【君も僕も相思病】

「恋って病みたいなものだと思いませんか」

「急にどうした」

夕食を食べ終えて風呂にも入り終わり寝る前に二人一緒にベッドでゆっくりとしていたところ、唐突に語り出したセリカに雪那は問いかけを返す

「だってそうじゃありませんか？」

「例えば？」

そうですねーとセリカは少し悩んだ後に

「例えば相手のことを思うと胸が締め付けられる思いになるとか、ご飯が喉を通らなくなるとか、ずっと相手のことばかり考えてしまうとか」

「まあ典型的な例だな」

それとそれと、とセリカは付けさもその人中心に考えてしまつて何をするにも手につかないとか

とまくし立てる

雪那はそこまで聞いてセリカが何を言いたいのか分からなかった

というより何を目的としてそんなことを言ったのか

「だからですね、年中雪那に恋してるボクは病気なんじゃないかと」

と、おどけて言うセリカ

「言つてろ」

というのは雪那の言葉 そつけない態度である

「恋の病ってなかなか治らないと聞きますよ」

「相手と結ばれば治るんじゃないのか？」

恋と言うのは相手と結ばれるまでが恋であつて、結ばれてしまえば愛になる……という少しロマンチックな論法だが雪那はそれが正しいのでは？とセリカに問う

対してセリカは

「いいえ、逆に結ばれた方が悪化しますね」

と、断言する

「何故だ」

「だって今まで一人で想像してたことが現実になっちゃうんですよ？」

と、言い

それに続けて

「きつと更に病は進行してしまいます 末期になりますよ」

と笑って見せた

「末期、とはどういう感じだ？」

雪那は少し面白くなってきた、と話に乗ってくる

「もうその人の事しか考えられなくなりますしその人無しじゃ生きていけなくなります こうなったらもう病から逃れる術はありませんよ」

ふふふ、とイタズラっぽく笑うセリカ

雪那はそれを見てふっ、と笑うと

「なら私も病気が」

と、言う

「雪那もですか？ボクと同じく？」

セリカが顔をのぞき込むと雪那はその澄んだ緋の瞳を覗き返し

「全く同じ病気にかかっているよ」

と優しい笑顔をセリカに向けた

セリカはその向けられた笑顔に屈託の無い笑顔で返す

「本当、仲いいですよね、ボク達」

「今更だろう」

セリカは雪那の腰にそつと手を回し、優しく自分の方へと抱き寄せた

「毎晩『仲良し』してますもんね」

「それも今更だろう？」

と、雪那が言うのとセリカはクスクスと笑った

何かおかしいのか、と雪那が問うと

「貴女が素直なのが」

と、答えた

雪那は応えるようにセリカの腰に手を回して

「病気同士なんだ、お互いにお互いを治す手伝いをするべきだろう？」

と柔らかな笑顔で、セリカの耳元に囁きかける

その囁きがくすぐったくて、セリカは少し身をよじる

しかし雪那の腕はセリカを逃がすまいとしつかり捕まえてきた

「普段からそうやって素直ならボクも苦労しませんかね」

「いつかお前が私を猫と称しただろう 気分屋だとな」

そう言えばそんな事も言ったことがあるかもしれない

かなり前にだが

雪那は続けて

「猫を可愛がるなら機嫌がいい時にしろ」

と言った

セリカははい、と言うと、部屋の電気を落としたのだった

End

【薬指に愛を灯して】

ジングルベルジングルベル鈴が……

と、町中で歌が鳴り響く

そう、今日は12月25日

クリスマスの日だ

皆が皆浮かれ騒ぐこの日、セリカと雪那は商店街に買い物に出ている

目的は勿論ケーキとチキンである

なんだかんだ言って雪那が西洋の催し物であるクリスマスもしっかり祝うようになったのは毎年それを話題に出し強引に誘うセリカのせいだったりする

雪那自身あまり催し事には疎くてつい無視してしまうこともあったのだが、セリカと一緒に暮らすようになってからというものの何かと催し事の度に誘われ仕方なく付き合う……という形が出来上がってしまった

だが、今年の雪那は違った

「(そうだ 今年は違うぞ)」

そう、今年は

「(今年はやんとプレゼントを用意したのだからな!)」

そう、毎年毎年クリスマスのプレゼントは雪那が貰ってからセリカにお返しに買っていたのだが今年には先にプレゼントを買っておいたのだ

それも……

「(これならセリカも驚くだろう)」

ペアリングである

あの貴金属に疎い雪那がペアリングを買ってきたのである

この事実だけでもセリカは大いに驚くに違いない

「(だが問題は……)」

いつ渡すか、である

理想的なのは食事の後などにスマートに渡すことだが意外とタイ

ミングが掴めないかもしれない
ならば……

「(いつそ外で渡してしまえ……と思ったわけだが)」
持ってきてしまったのである、指輪を

しかしこれがまたタイミングが掴みにくい

どこかで休憩した時に渡せばいいのだろうけど今回に限ってそんな仕草が全くないのだ

むしろこのまま家に帰ってしまうかもしれない

しかしそれではまたタイミングを逃してしまうかもしれない

いつ渡す? 今でしょ?

等と葛藤していると、唐突にセリカが顔を覗き込んできた

「雪那? どこか具合でも悪いんですか?」

「あ、いや……そんなことはないぞ 元気だ、うん」

「そうですか……いやー何か思い悩んでるなーと思ひまして」

凶星を突かれた

が、かろうじてそれを表情に出さなかった雪那はうまくそれをかわす

「そういえば買い物はこれで全部か?」

「そうですね これで全部です ただ……」

「ただ?」

と、聞き返す雪那にセリカはクスツと笑い

「せっかくだから大通りのクリスマスツリー、見ていきましようよ」

「(チャンスだ!?)」

と、雪那は思った

クリスマスにクリスマスツリーの下で指輪を渡す、最高のシチュエーションではないか、と

むしろこの機会に渡さずいつ渡すのかとも思った

セリカの言葉に雪那はうなずき

「ああ、お前が見たいなら寄っっていこう」

と、返した

そして歩き出す2人

雪那は頭の中で何度も何度も予行演習をしていた

ツリーの下で、浪漫ある台詞と共に指輪を渡す

可能ならその場で指にはめてやるのが実にロマンティックというやつではないのか

普段から色々無理をさせているのだからそれを労う台詞などと一緒に渡すべきか

いやせっかくのクリスマスなのだから愛の言葉とともに……等と考えているうちに大通りに着いた

目の前には見事に大きなクリスマスツリー

実に見事にイルミネーションされていて綺麗にきらびやかに周囲を彩っている

クリスマスの夜に見るには実に浪漫溢れるものだろう

「キレイですねーやっぱり」

「ああ、そうだな」

イルミネーションを見て、楽しそうに微笑むセリカ

その横顔を見て雪那は覚悟を決める

渡すなら今しかない

「セリカ」

「はい？」

雪那はセリカの左手を取ると、ポケットから取り出した指輪を嵌めようとして……

嵌らない

「えっ」

嵌らないのだ

「そんな馬鹿な……」

どうやらサイズを間違えて買ってしまったようで雪那は愕然とする

一方セリカはというと

「雪那、もう片方貸してください」

「は？」

「いいから、早く」

言われるがままにもう片方の指輪をセリカに渡す雪那
セリカはニツコリと笑い

「渡す方を間違えましたね？」

と、自身の左手の薬指に指輪を嵌めて見せた
そう

雪那は指輪を自分が嵌める方とセリカが嵌める方を逆にしてしまっていたのだ

実はセリカの方が指は太くて雪那の指は細い

これは豆知識

なので嵌らなくて当然、である

雪那はガツクリと肩を落とした

「せつかく黙って買ったのに……渡す時にこんなことに……私という奴は……」

「あはははは！ まあいじやないですか」

と言うとセリカはもう片方の指輪を、雪那の左手の薬指にそっと嵌めた

「雪那が何かしようとしてくれた気持ちだけでも嬉しいですし、雪那が考えて買ってくれたんだなってのも伝わりますよ この指輪のデザイン、ボクが好きそうですね」

指輪は特に飾りのないシンプルなデザインのシルバーリングだった

セリカはアクセサリーはあまり凝ったデザインは好まない

その好みを把握してでの選択である

「嬉しいんですよ？ 貴女がボクのことを考えてプレゼントをくれた事が」

「だが土壇場でドジを踏んでしまったのは格好がつかんよ」

「格好なんてどうでもいいんですよ……ほら」

雪那の左手に自身の左手を重ね、セリカは優しく笑う

「お互い、似合ってます？」

雪那はその笑顔を見たら、自分の失敗とか何もかもがどうでもよくなつて同じように笑い

「ああ、とつても良く似合うさ　私が選んだものだからな」

と言った

「大事にしますよ、これ」

「シルバーは手入れが面倒だから　大事にしななければならん」

「もー　そういうことじゃないですよ」

と、2人は手を繋ぎ家路に付いた

左手の薬指には銀の指輪

美しくも儂い

二人の愛の証

End

【責任取ってしあわせにする】

【責任取ってしあわせにする】

正月元旦

今日ばかりは仕事もお休み

依頼も来ない

そんな日に唐突に

《ピンポン》

来客の様子

セリカははいはいいつもの調子でドアホンのモニターに向かう

そしてそこに映し出されたのは

「はあい♪元気してるう?」

「お、お、おとお祖母様!」

そう

紛れもないセリカの祖母、水無月聖その人であった

「あら、お祖母様だなんて。ちゃんと私のことは聖さんとお呼びなさいな」

「いえ、その……聖さんは何の御用で来られたのですか?」

「可愛い孫の顔を見るついでに新年の挨拶をとね」

……………

とりあえず聖に家が上がってもらい、お茶などの準備をするセリカ
その間、雪那が聖に対応することになった

『十二皇家の姫』『不死の魔女』『千年姫』等と様々な異名がつくこの女性、見た目こそ完全に10代後半の少女のそれであるが実年齢はゆうに1000歳を超えられている

一体どんな魔法や薬でも使えばそうなるのか、それについてはいつも「秘密よ」とはぐらかされてしまう

雪那の家、如月家は水無月家に代々仕える家として存在していた
それ故に聖の話はよく聞き及んでいた

それに1度セリカと共に水無月本家に戻った時に会っているのだが、いまだに彼女が本当に1000年も生きているのか？と疑問に思うことがある

そういう人物は大抵浮世離れしているものだが聖はそんなことは全くなく、至って普通の人間のようなのである

俗世に疎いわけでもないし、一体この女性のどこに1000年もの時が詰まっているのだろう、と疑問に思う時がある

逆にそれが彼女の底知れなさを思い知らせてくることにもなるのだが……

「雪那ちゃんも久しぶりねえ、本家に来て以来だから三年ぶりくらいかしら？」

「ええ、ご無沙汰しておりました聖様……」

「そんなに堅っ苦しくしなくていいのよ、さんでいいわ、聖さんって」

「はい、聖さん……」

恐ろしさがある

えも言えぬ恐ろしさが

言葉一つ一つ吐き出すにも気を使う

この人の機嫌を損なえばどうなるか……考えたくも無い

それ故に慎重に言葉選びをする

「セリカとの仲はどう？上手くやってる？」

「ええ、よくしてもらっています」

「よくしてもらってる、じゃダメよお お互いに良くしなきゃ」

言葉一つ一つが本当に重い

ストレスで胃が痛い

会話とはこんなにも息苦しいものだったか

雪那がそんなことを思っていた時に、セリカがコーヒーを持ってきた

「聖さん、コーヒーしかないのですけど宜しいですか？」

「コーヒーは好きよ、いつもお茶しか飲ませてもらえないから」

と、セリカからカップを受け取り軽く一口

うん、苦いわね、と率直な感想を言いカップを置く

「貴女達、幸せにやってる?」

唐突な質問にセリカも雪那も固まってしまふ

少し拍を置いて、セリカが聞き返す

「幸せに、とは?」

「あれだけ啖呵を切って飛んでったんですもの、祖母としては孫の幸せが気になるのよ」

そう言っつて、楽しそうに笑う聖

「そうですね……とても幸せです、昔よりずっと」

「雪那ちゃんは?」

と、話を振られ雪那は少し動揺するがそれを顔に出さないようにして

「私も幸せです、昔より」

と、聖はふふふ、と笑い雪那の前へ歩み寄る

雪那は反射的に半歩後ずさりしてしまう

聖は雪那の前に立つと、人差し指を雪那の額にこっん、と付け

「責任持つて幸せにしてあげなさい」

と、笑顔で言っつた

……………

その後聖は適当にセリカたちと談笑した後帰っていった

雪那はソファーに突っ伏していた

あんなに疲れるとは思わなかった

物怖じせずに話せるセリカの根性が羨ましく思えた

一方セリカはというと、聖の持つてきたおみやげのおせち料理（非常に高そうな五弾重ねのお重にびっしりと入っていた）をどうするか悩んでいた

雪那はその姿を見て、なんだかかさつきまで色々と戸惑っていた自分が馬鹿らしくなってきた

なので雪那は

「聖理香」

「はい……はい？」

大切な時にだけ呼ぶ大切な名前で

「責任持ってお前を幸せにしてやるからな、聖理香」
と、宣言するのだった

End

【うつすら煙草の味がした】（キスあり）

セリカは喫煙者だ

ヘビースモーカーという訳では無いが、それでも1日にそれなりの本数のタバコを吸っている

最初はタバコの煙が嫌だった雪那もすっかりその匂いに慣れてしまった

時折多少吸う本数を減らせとセリカに言うのだが、あまり効果は見られなかった

そもそも何故タバコを吸うのか、それが雪那には分からなかった

何故好き好んで体を悪くするような煙を体に取り入れるのか

それが分からなかった

なので一回聞いてみたことがあるのだが

「こればかりは普段から吸ってる人間にしか分からないかと」

と、はぐらかされてしまった

あんまりいい気分はしなかったのでその場でセリカには1週間の

禁煙を言い渡した

のだったが……

事務所 今日の分の仕事は終わり、残りは事務仕事を片付けるだけとなっていた

「んー……」

指先で器用にペンを回すセリカ

なんとなくそのペンを口元に持っていったのは、離す

そんな一連の動作を見ていた雪那は

「そんなに辛いのか」

と聞いた

「なにかですか？」

「禁煙がだ」

分かっているのかわざととぼけているのか聞き返すセリカはまたペンを口元に持っていく

禁煙してはや三日目なのだが、やはり普段から習慣として染み付いたものを急にやめるとなると日常生活にも支障が出るものなのだろうか

セリカはいつもよりも集中力が足りない、そんな感じだった

「辛いと言われれば辛いですよ」

指先でペンを一回転

そのペンを雪那に向けて

「約束は、約束ですし」

そう言われると申し訳なくなるだろう、と思った雪那

しかし約束は約束

しっかりと守ってもらわねば

これはセリカの為でもあるのだ、と心を鬼にして

雪那は近くの来客用の飴の入っている籠の中から飴を取ってセリカに放り投げる

「口が寂しければ飴でも舐めていろ」

「雪那がキスしてくれたら口寂しくならないかも……」

「ぬかせ」

セリカの提案をバツサリ切り捨てる

今は仕事中

公私の区別はしっかりしているのが雪那である

セリカは「わかりましたよ」というとまた書類に目を通し始めた

「じゃあ家に帰ったら、ね」

とウインクしてきたがそれを無視して雪那も自分の分の書類に目を通す

内心少しドキツとしたことをかくしたまま

帰宅後、風呂を上がった雪那が見たのはベランダで佇むセリカの姿だった

「何をやってる?」

「ああ、少し夜風に当たろうかと」

そう言ったセリカの方から微かな煙臭さを感じた雪那はまさか、と

思いセリカのポケットに手を突っ込むと

「勝手に人のものを漁るのは感心しませんね」

と、ポケットの上から手を掴まれる

「こら、離せ……というか中に何が入っているか私には分かっているんだぞ」

「それは困りましたね……なおさら離せなくなりました」

「隠れて煙草を吸うくらいなら最初から辛いと言え！」

「いえ、実はですね」

そう言うとセリカは手をつかんだまま雪那の腰に手を回して自分の方に抱き寄せるとそのまま

「ん……」

薄紅に唇を重ねる

雪那が感じたのは夜風に当てられ少し冷えた唇の冷たさといつものセリカのタバコの香り

「……スマートにキスできますよね、こういう誘い方だと」

「阿呆が」

唇を離すと雪那はセリカに少し体重を預ける

「私は何も意地悪したくて言ってるわけじゃないんだ　ただお前の体が心配で」

「分かっていますよ」

セリカはそれを言葉ごとしっかりと抱き締めて

「タバコ吸ってもボクは長生きするってことをお見せしますから」

「……ああ、見てやる」

2人はもう一度だけ口付けると、そのまま部屋の中に戻っていく

End

【飽きたので口直しを】

「ふう……コーヒー煎れてきますね」

今日は日曜日

休みの日に2人で思い思いの時間を過ごしている時に唐突にセリカが立ち上がる

セリカは部屋だとかかなりの確率でコーヒーを飲んでいることが多い

大抵の場合はマグカップにコーヒーが入っている

特に悩み事や考え事をする時にコーヒーを飲んでいると捗るらしいが……

今回もそんな感じなのだろうか、と思い問いかけると

「いや、単に飲みたくなっただけですよ？」

と、軽い答えが返ってきた

いつものことか、と流そうと思ったがここで引き下がるとセリカは大体の場合自分だけで抱え込むことが多いと雪那は知っている

なのでもう少し踏み込んでみる

何か考え事でも？と

するとセリカはぼつが悪そうに前髪を弄りながら

「あー……バレちゃいましたか」

とため息交じりに答えた

「お前がずつとコーヒーを飲んでるのはいつものことだが、今日は少し数が多い気がするからな」

「よく見えますねえ……愛が深い」

いつもの調子で茶化してくるセリカに雪那はすぱつと本体にはいろうとする

「ぬかせ……で、なんで悩んでる」

「いやー……あんまり大したことではないんですけど」

大したことない、というわりには少し深刻そうな顔をしているような気がした

「言ってみろ 何か力になれるかもしれん」

「いいんですか？」

「私とお前だ 今更だろう」

雪那がそう言うのとセリカの顔がぱつと目に見えて明るくなった
わかりやすいヤツ……とは思っただけで口には出さず雪那は要件
を聞く

「問題はですね……コーヒーなんですよ」

「は？」

「だから、コーヒーなんです」

なんだ拍子抜けだ……と言うとセリカは少しむっとした顔をした
「ボクにとってはモチベーション維持する為に大事なものなんですよ
？」

それは先程述べたとおりである

セリカにとつてコーヒーとは潤滑油のようなものでなくてはなら
ないものである

「あー……それはすまなかった それで、なんでコーヒーで悩んでい
るんだ？」

「それはですね……」

セリカはコーヒーの豆の入った袋を持って

「飽きました」

とだけ言った

「は？」

と雪那が呆けると

「飽きたんですよ、味に」

と、続けるセリカ

「豆を変えればいいんじゃないか？」

「そう言いますけどほとんどの豆は試しちゃったんで……」

そうだった

セリカのコーヒーにかける情熱はかなりのもので毎週日曜には珈
琲店に行って1週間分の豆を買ってきて自分で挽いて粉を作って
コーヒーを飲んでいる

しかも毎回違う豆を買ってくるのだがそんなペースで買っていれ

ば店の豆を網羅するのも時間の問題

となれば味に飽きるのも当然なのではないだろうか

しかしもう新しい豆は無いわけだし新しい味は期待出来ない

となるとどうすれば……と、セリカが悩んでいるところに雪那は思いついたことがあった

「あー……ブレンド？というやつをやってみたらどうだ」

「ブレンドですか……確かにやったことはありませんね」

コーヒー趣味も突き詰めるとそこに行き着くらしい

セリカもそこまで行く時期が来たという事ではないだろうか

「確かに自家製ブレンドはやったことありませんね……名案です雪那」

「それは良かった」

その言葉を聞いたセリカは早速……とコーヒー豆を探して気が付く

「あー……雪那、出かけませんか」

「混ぜる豆が無いのだろう」

「おっしやる通りで……」

仕方ないな、と雪那が言いながら立ち上がるとすみません、と謝るセリカ

「何、たまにはお前の趣味にも付き合ってやりたくはある」

「愛を感じますよその台詞、惚れ直しちやいそいです」

雪那はふつと笑うとセリカの頭をぽんぽんつと叩き

「お前は一生のうちに何度惚れ直すつもりだ」

と笑った

セリカはそんな雪那の横顔に軽くキスをし

「さあ？でもきつと数え切れないくらいですよ」
と、応えた

End

「そういう目で見ていいですか」

風呂上がり、一日の物事が終わって一番くつろげる時間
そんな時間は雪那とて例外ではなく

「ふう……」

髪をバスタオルで拭きながらリビングでくつろいでいた
見ているのは何の面白みもないテレビのバライティ番組

この際内容はどうでも良く、暇を潰せさえすればいいのだというこ
とだ

なぜ暇を潰すのかといえば、今はセリカが風呂に入っているからだ
普段から一緒にいて、普段からほぼ常に会話して過ごしているので
セリカのいない時間は持て余し気味になる雪那だった

一緒に入ってしまったえば、と思うだろうが……

「(正直、私には目の毒すぎる)」

そう、普段『事』に及ぶ時は部屋を薄暗くしているのはつきりとお互いの体を見ることはないので風呂場のようなしつかりと照らされた下で見るセリカの肢体は、正直直視できないくらい雪那には恥ずかしかったのだ

「(……とはいえ、やはり慣れなければならぬのか)」

そう、もう一段階踏み込んでみるのもいいのではないか？

これからは部屋も明るくしてはつきりとお互いを見れるようにして……と考えたあたりで雪那は頭を振ってその考えを払拭する
まるでそれでは

「(私がセリカの……をはつきり見たいようではないか!)」

要はそういうことなのだがそこは堅物大和撫子な雪那

そういう不埒な考えが許せないのか

「(しかしお互いを信頼してるならこそだな……ああ私は何を考えているんだ……)」

悶々と考えは巡る

巡り廻って一周して再び雪那にその事実を突きつける

不埒な考えをしていた自分のことを

「(ああもう……とりあえず落ち着くか……)」

とりあえず頭を冷やすために台所に水を取りに行くことにした
台所に向かう途中にふと考えが浮かぶ

「(悩むのも馬鹿馬鹿しい はっきり言えばいい 何を悩む必要がある 私達は)」

その先を考えたところであつと顔が熱くなるのを感じた

何度聞いても言われても考えても思っても、恋人という響きに慣れない自分に恥ずかしさを感じる

「(すっかりしろ……私達は恋人なんだ そしてその相手をしっかりと目で見たいということは何もおかしくはない)」

水を飲んで頭を冷やすつもりが余計に考えが回ってきてクラクラしてくる

そこに

「せ、つ、な」

「ひあう!？」

背後から、耳元に当たる吐息と声

素っ頓狂な声を出してしまう雪那

振り向けば風呂から上がってきたセリカがそこにいた

「な、なんだ……もう上がったのか」

「はい、いいお湯でした……ところで雪那」

「なんだ」

セリカは雪那の頬に手を当てる

まだ熱気を帯びたすこし湿った手は雪那の頬に吸い付く

そのまま愛おしむように少し撫でると

「何か、考えてましたね?しかもボクのこと」

と、見事ズバリと核心を突いてきた

「な、なんで知ってる」

セリカはクスツと笑うとそのまま頬を撫で続け

「上気した頬、飲んでるのはお水、大方エツチな事考えてそれを振り払うためにお水飲んで頭冷やそうとしたんでしよう」

「ぐっ……」

大当たり

セリカには何もかもお見通しなのか、と雪那は肩を落とす

「素直に言った方がスムーズに進むと思いませんか？」

セリカは頬を撫でる手を下へ、雪那の鎖骨のあたりへと這わせる
「さて、何考えてたんですか？」

鎖骨の形を確かめる様になぞられる手先に、雪那はぞくぞくするよ
うな感覚を覚えながらもその手をやんわりと振り払って

「……後で言う」

「えー……今聞かせてくださいよー」

食い下がるセリカ

しかし雪那はこのまま相手のペースに乗せられてはダメだと思い
口を噤む

するとセリカはニヤツと笑う

「まあ雪那がボクのことをそういう目で見てるのが分かっただけでも
僕は嬉しいですけどね」

「そういう目ってなんだ……」

「エツチな意味で♪」

「くう……」

当たっているだけに言い返せない

「まあそれは後で聞かせてもらいますよ……ゆっくりね」

「わかったよ……笑うなよ」

「笑いませんって」

そう言いながらリビングに戻る雪那の足取りは重く、対照的にセリ
カは軽く見えた

End

【キスのために言葉を捨てて、（キスあり）】

キス、きす、K i s s

唇と何かを触れ合わせるこ、接吻、口づけ、言い方は様々

そして、キスの仕方様々

唇と唇、手の甲、指先、頬、額、人には言えないあんなところまで
とにかく人はキスをする

理由は様々、親愛だったり愛情だったり

でも自分からすることは少なくて、相手からすれば愛情が偏っているのではないかと疑いたくなるようなそんな比率

雪那はそれに悩んでいた

自分から進んでキスすればいい、それだけの話なのにそれが出来ない

理由はわかっている

単に恥ずかしいのだ

まるで生娘かと思われるかもしれないが子供の頃から剣一筋に生きてきた雪那に恋愛は難しすぎるのだ

しかし、それでもセリカのことを好きだという気持ちは誰にも負けない自信はあった

自信だけは、だが

後はそれを行動に移すだけなのだが、それがなかなか上手くいかない

自分からキスしよう、とすると何故かタイミングを外してしまうのだ

いつも大体間が悪くて、そのタイミングを逃してしまう

こんなままではいつになったら自分から自然にキスできるのか

……
そんなことを悶々と考えているうちに今日の仕事が終わったことに気がつくのだった

「ああ、おかえりなさい雪那」

「ただいま」

事務所に帰ると、セリカがコーヒーを淹れて待っていてくれた。いつも雪那が帰ってくるタイミングでコーヒーが淹れられているのだが、これはどうやってタイミングを凶っているのだろうかと思議でならない

セリカに問いただしてみると

「秘密ですよ」

と、はぐらかされてしまう

とにかく不思議なものである

ソファアにどっしりと腰掛け、淹れてもらったコーヒーを口にする。雪那の好みで少しぬるめ、砂糖は普通より多めだ

外の寒さに心から冷えた体にコーヒーのぬくもりが暖めてくれる。砂糖の甘さも疲れた体には嬉しかった

「今日も力仕事、お疲れ様でした」

「なに、この程度大したことじゃない」

「力の無い僕が行っても足手纏いになりますからねえ」

つかつかと歩いてきて、雪那の隣に腰掛けるセリカ

そのまま雪那の顔を覗き込んで

「本当に、感謝してますよ雪那」

と、微笑んだ

その優しい顔を見て、ああ愛しいな、と思った雪那は何も言わずにその唇に自身を重ねた

1、2、3

十数秒経ってからだろうか、特に示し合わせたわけでもなくお互いに体を離す

「……ちよつとびっくり」

「何がだ」

セリカは唇を抑え、とても嬉しそうに笑い

「貴女からキスしてくれるだなんて」

雪那はその顔を見ただけで自分のしたことこの恥ずかしさを再実感したのか顔を赤らめた

「私だって、たまには、だな」

「たまには、なんですか？」

「……ええい、言わせるな!!」

そう言うと雪那はもう一度セリカに口づけて、すぐに身を離し

「これでわかるだろう、言わなくても」

「えー……わからないですねえ」

ニヤニヤと笑うセリカ

からかわれている、と思った雪那はとりあえずそのニヤケ面を軽くつねるのだった

End

「不味くても笑って美味しいなんて絶対言わない」

「……よしー」

時刻は午前2時、普段ならとつくにベッドに入っている時間だが雪那はキッチンに立っていた

今日は2月14日

そう、バレンタインデーだ

去年まではあまりこういう洋菓子を作るのが得意ではなかった雪那は市販品を買ってセリカに渡していたのだが、今年は一念発起して手作りの品を渡そうと思ったのだ

そして何の偶然なのか、それはいとも簡単に完成してしまった

「(あっけなさすぎる……まさかしくじったか……?)」

そんな筈はない、とレシピ本を見返して材料や工程を見直す

しかし間違ったところは一切見当たらなかった

つまり

「(これで完成……なんだ、意外と簡単じゃないか)」

雪那が作ったのは生チョコ

比較的難易度が低いものだった

しかしそれでも初めて作ったのに成功するとは、雪那の手腕がいいのかそれとも偶然か

とりあえずこれはセリカにバレないようにと冷蔵庫の奥の方へと押しやる

これで一安心

寝室に戻ると、なんの違和感も感じずにすやすやと眠るセリカの姿抱き着いて寝ていたのだからそれが離れた時くらい違和感を感じて目が覚めてもいいものを

まあ今日はそれが都合か……

と、ベッドに戻る雪那

その時セリカの口の端がわずかに歪んだ気がした

翌日

一日の業務を終え、家へと帰ってきた2人

とりあえずは着替えて、ゆつくりしよう……というところに雪那がなにやら落ち着かない様子

セリカはそんな雪那の様子を見て何かあったのかと聞くが、雪那は何でもないと答える

セリカはふふつと笑い

「そういえば今日はバレンタインでしたね」

と、何の前振りもなく言ってきた

雪那はドキツとしたがそれをおくびにも出さずに

「ああ、そうだったな」

と答える

あくまでも動揺を顔には出さず平成を装っておく

「じゃあ冷蔵庫に入ってるチョコは僕宛ってことでいいですよね？」

と、何の迷いもなく核心を突いてくる

「なんで自分宛だと分かるんだ」

「だって雪那がボク以外にチョコあげるなんて考えられないじゃないですか」

「ぐっ……」

当たり前である

セリカが雪那が一番であるように雪那にとってもセリカが一番

渡す相手など初めから決まってるって当然なのだから

「仕方ないな……ほら」

雪那は冷蔵庫からチョコの入った箱を取り出すとセリカにすつと差し出した

「いやー愛する人からチョコがもらえるなんてボクは幸せだなあ」

「うるさい、いいから食え」

「はいはい」

セリカの茶化したセリフすら恥ずかしくて雪那は早く食べるよう

に急かす

セリカは慣れた手つきで箱を開けると生チョコをひとつまみして口へと放り込む

「いやー嬉しいですねえ」

ニコニコとした心からの笑顔 とても満足しているようだ

しかし……？

「おい」

「なんです？」

「美味しいのか不味いのかどっちだ？」

セリカは味に関しては何も言っていない

ただニコニコとはしているだけである

つまり……

「まさか……」

と思い雪那は自分の作ったチョコを口へと入れると

「うっ……苦いなこれは……」

そう、苦かった

どうやら雪那は調理用チョコに砂糖が入っていないのに気付かず砂糖を入れ忘れたらしく相当ビターなチョコに仕上がっていたのだ

なのにセリカのこの笑顔

「……お前は何かあっても文句を言わんな」

「そりゃあ愛する人が丹精込めて作ってくれたものにケチをつけるなんてナンセンスですよ」

といいもう一口

「はあ……慣れないことはするものじゃないな」

「いえ、その気持ちだけでもとてもありがたいですしうれしいですよ？」

するとセリカは手を伸ばすと雪那の顎を持ち上げて

「なのでお返しは用意してありますから、期待しててくださいいね？」

と、優しく微笑んだ

その笑顔だけでなんだか胸がいっぱいになってしまった雪那はその手を振り払うことすら忘れて

「わかった……」

と、ただ俯くばかりなのだつた

h a p p y V a l e n t i n e !!

「今なら素直に好きといえる」

雪那は悩んでいた

素直に好意を言えない自分の性格を

いつもいつも恥ずかしくて強い言葉で誤魔化してしまう

そんな自分こそ恥ずべきことだと思った

セリカはいつも素直だ

好きなことには好きと言い嫌いなことは嫌いとはつきり言う

自分に素直な生き方をするセリカがいつも羨ましく思えた

自分もそんな生き方をしてみたいものだ

とりあえず考えを変えるためにとりあえず今日から少しだけ素直
になってみようかと考えた

なので

「好きだ、セリカ」

正面から言ってみた

「はい、僕も好きですよ雪那」

と、あっさり返されて終わり

正直、ガクつときてしまった

せつかく正面から好きだと言ったのにさっぱり伝わってない気が
した

どういう時にいえば伝わるのだろう

いろいろ悩んで悩んで悩んで

いつもの時に伝えても伝わらないと考えたのだが

「(じゃあいつ言えば伝わるんだ……?)」

と、逆に考え込む結果になってしまった

なんでこんなことで悩まなきゃならないんだ……と頭を抱えたり
した

普段からセリカはどんな時に好きと言ってくるだろうか

ちよつと思ひ出してみた

朝食の後、二人で身支度を整えている時

不意に背後から、ぎゅつと抱きしめられた

耳元に、吐息が、当たる

「好きですよ、雪那」

「分かっているから離せ」

お昼時、コーヒーを飲みながらくつろいでいる時

こちらの目をまっすぐ見つめながらセリカが言う

「好きですよー雪那」

「知ってる」

夜、『事』の最中に

「愛してますよ、雪那」

……思い出すだけで顔が火を吹きそうだ

と、雪那は顔を抑える

とりあえず分かったのは雪那は雪那、セリカの真似をしてもなんにもならないということだ

なら自分はどうすればいいのか、そう考えて考え抜いた末の答えが

……

「あの一……雪那？」

雪那は今ベッドの上でセリカに覆いかぶさっている

悩んだ末に出した答えはボディランゲージという単純な答えだった

雪那らしいといえれば雪那らしいのだが

「セリカ……」

「はい、なんですか？」

「私は、お前を……」

そう言いかけたところで、雪那の唇にセリカの指が重なる

「言わなくても伝わってますよ、ちゃんと」

「いや、それでもだな……ちゃんと知らない」と

伝わらないこともある……と言いかけたところで

「言わないからこそ、伝わることもありますから……ちゃんと貴女の気持ち、受け取ってるつもりですよ？」

と、優しげに微笑むセリカに雪那は何も言えなくなってしまう

いつもいつもこういう時の駆け引きはセリカの方が上なのだ

「お前はいつもずるい……」

「はい、ボクはずるいんです……だから」

グイツと雪那の服の襟をつかんでこちらに引き寄せるとその耳元
で

「無論この先も、期待してますから」

と、悪戯っぽく笑う

その声にやはり勝てないと確信する雪那なのだ

End

「キスも上手くなったから」

「雪那、キス上手くなりましたよね」

もう何度目か分からない口づけの後にセリカがそう言った

雪那はかあつと頬を赤らめそれを必死に否定する

「いや、普通だろう！そもそもあんなに毎日何度もしてれば自然と上手くも……」

そこまで言ったあたりで真赤になってうつむく雪那

セリカはそんな雪那がたまらなく愛おしく思えてそつと抱き寄せた

「上手くなる分には問題ないですよ それをボクだけに向けてくれればいいですし」

「そんなの……私にはお前しか」

そう言いかけたところで雪那の唇にセリカの指が置かれる

「分かってますよ 再確認しただけです」

確認したくなるのは何故か

この人が自分を想ってくれている気持ちを疑うことなんかないのに

何故かたまにこうやって試すようなことをしてしまう

不安だからだろうか

同性だから

そんなことは問題にならないともう何とも確認しているはずなのに

ああ、自分は不安なのでは無い

ただ確かめたいだけなのだ

今あるこの幸せが、本当に現実なのかと

地獄のようだった『家』での仕打ち

それでも耐えられたのは彼女が側にいたから

家を飛び出した後に彼女が追いかけてきてくれた時は安心感を覚え
えた

そしてそのまま2人で逃げる道を選んでくれた時は未来が開けた

と思ったものだ

そのまま2人を誰も知らない街にやって来て、2人で開業して、二人で暮らしている

これ以上の幸せがあるだろうか

そしてこの幸せがもし幻だったとしたら

自分はきつと立ち直れない

だからこそ確認するのだ

彼女とのつながりを

「雪那の気持ちはちゃんと伝わってますよ　ちよつと、いじわるしたくなっただけです」

「お前はいつもそうだな」

雪那は肩をすくめてみせる

セリカはその姿を見てクスクスと笑い

「僕は怖がりですから　ちゃんと確認しないと、怖いんですよ」

そう言って笑うセリカの顔に、少しだけ影が見えた

それを雪那が見逃すはずもなく、雪那はセリカの頭をぽんぽんと優しく叩いた

「何するんです」

「なに、寂しがりやが寂しそうな顔をするものだからな　慰めてやろうとな」

「別に僕は寂しくなんか……」

「顔は口ほどにものを言うものだぞ」

そう言われるとセリカははははと力無く笑い

「バレちゃいますか」

「当たり前だ　お前とどれほど付き合ってると思う」

雪那はさも当たり前のように言っただけ

「じゃあこういう時はどうすればいいかもっ？」

「こう、だろうっ？」

雪那はセリカの頭を掴むとぐい、と引き寄せてそのままキスをした
キスするだけでなく、舌も絡め、合わせ、唾液も交わす

言葉よりも伝わることはあるのだと、そう語るかのような情熱的な

キス

少しして口を離すと、二人の間に唾液の橋が名残惜しそうにかかる
片時も離れていたくない、そんな気がして

「……上手くなりすぎのも考えものですね」

「うるさい」

ふたりはそのまま重なった

【無意識のゼロセンチ】【眠る前にはキスをして】

【無意識のゼロセンチ】

今日は日曜日

世間一般では休みの日

それは便利屋であるセリカたちには関係ない話なのだが、今日はたまたま仕事が無く丸一日休みになっていた

なので、お互いに思い思いの時間を過ごしていた

セリカは趣味のコーヒーのブレンドを、雪那は愛刀の手入れを

それをお互いに隣り合わせに座りながら行っていた

「雪那」

おもむろにセリカが口を開く

「なんだ、どうした？」

雪那が聞き返すとセリカはくすくすと笑い

「僕達って本当に仲いいなと思ひまして」

「今更だな」

セリカはくすくす笑いながら自分たちの間の空間を指差して

「ずっとぴったりにくっついてるんですもん」

と、嬉しそうに笑っていた

「気付かなかったな」

「そうなんですよ、気が付かない間にぴったりと」

雪那は少し恥ずかしそうに頬を指で搔くと

「全く気が付かんな もう、お前が隣にいるのが私にとっては当たり前だったから」

「それはボクもですよ」

と、セリカ

「雪那が隣にいて、ボクは安心できるんです」

「それは私だって同じだ」

雪那はふつと笑い、セリカの頭を撫でた

「お前の隣が今の私の居場所なんだ」

「そんな口説き文句どこで覚えてきたんです？」

「間近にそういう人間がいれば齒の浮くような台詞だって浮かぶようになる」

「言ってくれますねえ」

セリカは頭を撫でる雪那の手に手を重ねてやわらかく微笑み

「でもその気持ちはとても嬉しいんですよ　ありがとうございます雪那」

それを聞いた雪那の顔がかあつと熱くなる

胸が高鳴るのも雪那は感じていた

いつもである

いつもこの笑顔に自分は勝てないのだと

「雪那、顔赤い」

「うるさい調子に乗るな」

「さっきまではデレデレだったのに今度はツンツンですかー？忙しいですねえ」

「うるさい」

End

【 眠る前にはキスをして 】

「おやすみ前はー」

「キスしろだろ、知ってる」

「冷たいですよ雪那……」

すんなり受け流してくる雪那に寂しさを感じるセリカ

雪那はそれを我関せずという感じに突き放してくる

そんな雪那にすぎるようにセリカは抱きつくとうーと唸り

「そんなに冷たくするとボクだって愛想尽かしちゃうんですからね」

と、言うとき雪那ははつと真顔になり

「それは……本当か……？」

「どう思います？」

「……その、だな」

「なんです？」

少しだけツンとした態度で返すセリカ

雪那にはそれだけでも結構効いたようで

「それだけは許してくれ……頼む」

と、真剣な顔で謝られてしまった

雪那はまっすぐこっちを見つめると真剣な眼差しで

「お前に嫌われたら私は……私は……」

と、思いつめたような表情をしたのでセリカは慌てて言ったことを撤回した

「嘘ですよ嘘！そんな雪那を嫌うわけじゃないじゃないですか！考えればわかるでしょう！」

「だって普段そんなことを言わないから……」

「だからって耐性無すぎですって……」

普段あんなに素直じゃない雪那がここまでするのは相当こたえたからで、それはつまり

「相当ボクのことか大事ってことですよねえ」

「そんなこと当たり前だろう 何を今更」

「ですよねえ」

うんうんと頷くセリカ

「私にとつてはお前が生きる意味だからな……」

「だったらもつと素直になってくださいよー 逐一これだと僕も結構

凹みますよ？」

「それは……」

雪那は恥ずかしそうにうつむくと

「素直になれないんだ、恥ずかしくて……」

と、雪那が消え入りそうな声で言うときセリカは雪那のことをぎゅつと抱きしめた

「セリカ……？」

「そういう貴女がたまらなく魅力的に見えるんですよ」

雪那はセリカをぎゅつと抱き返すとその頬にそつと口付けた

「素直になれるようには極力努力する……だから」

「もういいですよ、さ……明日も早いですがもう寝ましよう？」

「ああ」

ふたりしてベッドに潜り込むと、もう一度だけキスを交わしてから眠りについたのであった

E
n
d

「一緒にいたいだけですよ、他に理由がありますか」

「さて、今日の予定は……3件ですね」

手帳を見ながら車を運転するセリカ

正直危ないから前を見ろと思う

それを言っても無駄なのだろうけど、と雪那は思った

「今日は力仕事が多いんだったか？」

雪那がそう聞くとセリカは前を見たまま答える

「そうですねー 引越しの手伝いが1件、家の片付けが1件、後子供の出迎えが1件」

「なら分担した方がいいんじゃないか？お前、力仕事は苦手だろうに」

と、雪那が言うとセリカは軽く頬を膨らませた

「イジワルですね、雪那」

「何がだ」

セリカはハンドルを切りながら目線だけを雪那に向けて言う

「出来る限り一緒にいたいんですよ」

「苦手な仕事をしてでもか？」

「そこはほら、愛の力でなんとか」

「ぬかせ」

そうこうしている内に目的地の家が見えてくる

小さな一軒家だ これならあまり荷物も無いかもしれない

「まあいい 頼りにしてるぞ、所長」

「その呼び方はやめてくださいってば……」

そう言い合いながら2人は車を降りた

数時間後……

「いやー大変でしたねえ……」

「ああ、思ったよりも物があつたな……」

物があまり無いだろうという期待は大きく裏切られたのだった
予想よりも遥かに多い物の山に2人は辟易したのだった

「あそこまで物溜め込んで暮らすなんて僕には無理ですねえ……」

「お前は無駄を省くものな」

「そうですねえ 無駄はあるより無い方が理想的です」

セリカはそういうタイプだった

無駄を許せないというワケではないがなるべくなら無駄がない方が
いいという考えだった

それは時間においても同じであつて

「さて、そろそろ二件目ですよ」

「ふむ……疲れたなら車の中で休んでいてもいいぞセリカ」

「冗談 流石にそれは悪すぎますよ雪那」

嫌が応にも付いていく、という顔をセリカはしていた

雪那は仕方ないな……とセリカの同行を認めたのだった

時刻は変わり、夕刻

「あー……今日も1日よく働きましたね……」

「全くだ」

あの後2人は家の片付け、子供の迎えという依頼を片付け事務所に
帰ってきていた

今日の仕事は終わり、後は家に帰るだけと言ったところだった

「雪那」

セリカが窓に鍵をかけながら言う

「なんだ」

「昼間の話、覚えてます?」

「昼間の話?」

するとセリカはもう!と少しむくれ顔でこちらを向く

「一緒にいたいって話ですよ」

「ああ、それか」

雪那はなんだそれかとなんともないような顔で言う

「一緒にいたいならいいからいい。それを選んだのはお前だ。なら私は文句は言わないさ。それに……」

「それに？」

セリカが聞き返すと雪那はふっと笑い

「私だって、同じことを思うのさ」

と、優しく言った

「今の台詞録音するんでもう1度どうぞ」

「お断りだ」

今日も1日お疲れ様でした

End

【ギュツて抱き締められるのがいちばんスキ】

セリカに抱きしめられるのが好きだ、と雪那は思う

前から抱きしめられるのもいい

後ろから抱きしめられるのもいい

立ってる時に

座ってる時に

横になつてゐる時に

抱きしめられるのが好きだなあ、と雪那は思うのだ

でも正直にそれを伝えられずにいた

むしろ嫌がつてる風に見えてはいないだろうか

もし本当にそう思われたら2度と抱きしめてくれなくなる……？

そう考えたらなんだか何もかも終わりの気がしてきた

そう思った雪那は、行動に出ることにしたのだった

その行動とは……

「私を抱け、セリカ」

直球勝負……ッ！

真正面から抱いてくれという勇氣！

するとセリカは眉も動かさずにすごく自然な流れで、

「はい、雪那」

ぎゅつと抱きしめてきた

背に回された手、触れあっている部分から伝わるぬくもり

耳元で聞こえる感じるセリカの吐息

これが好きで抱きしめられているのだと雪那は確信した

が、問題はそこではないのである

雪那からもなにかしろの反応を見せなければこのままではいつもの通りで終わってしまう

なので雪那は少しぎこちないながらもセリカの腰に回した手を、
ゆっくりと上へと伸ばして……

首に回す

ぎゅつと抱き返す

強くないか？痛くないか？

それが気になってそれ以上強くは抱けなかった
ただこれで雪那の気持ちは伝わったハズ……！！

そう思った矢先、お尻の方から違和感を感じる

気づけばセリカの手が、雪那のそのなだらかな双丘を撫で回してい
た

ここは堪えろ……！！

と自分に言い聞かせる雪那

ここで拒絶してしまつてはいつもと同じなのだ

自分はこれからもっと先のステージへ(?) 行くのだと

なので、そのお尻を撫で回すセリカの手に、自分の手を重ねてみた
意外な反応にセリカはクスツと笑い

「誘つてます?」

と、耳元で優しく囁く

体の芯からも熱を感じさせるその言葉と吐息

雪那は自分が昂つてきているのを感じていた

これは……

「やっぱり、ダ、メだ……っ」

「ダメじゃなくて」

手を添えた手を握られ、それを自分の目の前に持つてくると

「貴方のいいよ、が聞きたいです」

反則だった

その言葉にもう雪那は抵抗する気も起こらなくなつてしまう魔法
のような言葉

セリカはいつもずるいのだ

雪那の喜ぶような言葉ばかりかけてくる

それがいつも雪那を惑わせ、弄り、遊ぶ

いつもセリカは、ずるい

雪那はそう思いつつもセリカに反論することも出来ず

「……わかった」

と、いつもOKを出してしまうのだ

「じゃあ続きはベッドで♪」

そう言って寝室に消える二人の姿

その姿はしっかり重なったままだった

End

【デレ待ちなう】

雪那は猫のようだ、とセリカは思っている

気まぐれに甘えてきては、すぐ突き放してくる

そしてまた甘えてくる

この態度は一緒に暮らし始めて何年経っても変わらないし、本人も多分変えられないのだと思う

一度染み付いた習慣を変えることが難しいのと同じように、人との距離感もそう簡単に変えられるものではない

きつとこれが雪那にとってのセリカに対しての適切な距離感なのだ、セリカは理解していた

だからこそ、雪那が甘えてきた時は全力で構い倒すし、離れた時は深追いせずに見守る

しかしそんな距離感が寂しく感じる時が、無いわけでもない
いつも何ともない風に振舞っていても心の奥底では淀んでいくものなのだ

ここ数年で知らされたのも事実である

今日はそんなセリカ流の雪那の構い方の1日のお話

「雪那ー」

「なんだ」

セリカの呼びかけに答える雪那の声はどこか不機嫌そうで

セリカは「これは何かあったな」と察した

「どうかしましたか？」

「いや……本家から手紙がな」

「ああ、お義父さまから……」

「その通りだ」

不機嫌になる、ということとは相当苦言でもあったのか、とセリカは

思い雪那の目の前にあつた手紙をさつと取って読んでみる

雪那が「あつ」とか「読むな馬鹿」とか言っているが無視

手紙一つで不機嫌になるほどのだから相当な事が……と思ひ読み進めるとある文面に目が止まる

「えーつと……『早く孫の顔が見たい　その辺は考えるつもりは無いのか』」

「だから読むなと言ったんだ！」

あー……とセリカは納得

科学の進歩した現在、同性同士で子供を産むことは不可能ではなくなっている

もちろんそれに関する偏見などもとうの昔に消え去っている

それ故に恋人と二人で暮らしている雪那に対して親がそういうのは当然の帰結であり……

「それで不機嫌だったと」

「だから読むなと言ったんだ……」

頭痛でもするのかと額を押さえる雪那

セリカはニコニコしながら言う

「まあボクもお祖母様からいろいろ言われてはいましたが……」

「言われていたのか……」

言われていた

「ひ孫の顔はいつ見れるのかしら？」とか「結婚式には呼んで頂戴」とかやたらウキウキとした表情が浮かぶ

もちろんセリカとしてもそこら辺を考えていなかった訳では無い

いつかは……と考えていてそのタイミングが今まで無かっただけだ

「なんなら作っちゃいます？子供」

「なっ!？」

みるみるうちに真っ赤に染まる雪那の顔

そんな雪那の顔が面白くて畳み掛けるように続けるセリカ

「まあボクも子供はいつか作らなきゃなあと考えてましたし両家からこんなに望まれているならそれに応えるのはボク達の役目でしょう

し」

「あー……その……うん……」

すっかり黙りこくってしまふ雪那

その姿を見てセリカは少し残念そうに

「いらぬいんですか？子供」

すると雪那はガバツと顔を上げて真っ赤な顔のまま

「そんなことない!!私だってお前の子供なら幾らでも産んで……そもそも子供自体はいつかは作らなきゃならんと考えていたし機会がなくって言い出せなくってそもそもお前はいつも二人で入れれば満足だとか言うから私は……それが、言い出せなく、って」

と言いかけたところで雪那の口が止まる

「なるほどーそれが雪那の本心ってわけですね」

「いやっ ちが、ちがわ……ないけど」

ぷしゅーっと蒸気でも出るんじゃないかというくらい真っ赤に染

まる雪那

セリカはそんな雪那の姿がいとおしくてたまらなくなってしまう

いつも、デレる時は唐突なのだ、雪那は

「まあ、子供のことは後で考えましょう そんな急に答えを出すようなことではないですしね」

「あ、ああ……そうだな」

「そ・れ・よ・り」

セリカは雪那をぎゅっと抱きしめ、その耳元で囁く

「せっかくですし、しますか？赤ちゃん作る、れ・ん・し・ゆ・う・♪」

「ば、馬鹿！」

雪那はばつと抱きつく腕を振り払う

「あらあらフラれちゃいましたか」

「いや、そういうわけじゃなくて、こういう流れで言われたら誰だって恥ずかし」

「そういう顔が見たいからこういうタイミングで言ったんですが？」

「阿呆が！」

そんな雪那の頬に手を添えて、セリカは甘い声で問いかける

「嫌？」

「嫌……じゃ、ない」

「よろしい」

そう言うとセリカは雪那をソファァーに優しく押し倒した

End

【きみの寝顔におはようを】

ふと、セリカは目が覚めた

時刻は朝の4時 まだ普通なら寝ている時間だ

寝直そう、そう思い瞼を閉じる

眠れない、確信した

完全に目が覚めてしまっている

これはもう起きるしかないか……ともそもそとベッドから這い出る

雪那が起きるのは5時

つまりあと一時間は暇を潰さなければならぬということである

「……微妙な時間ですね」

1時間というのは短いようで長く長いようで短い

今日の仕事の確認でもしようか……と思った矢先にふと今日は自分が朝食当番なのを思い出す

雪那とセリカは日々の食事の用意を交代で行っている

昨日は雪那だったので今日はセリカの番だ

ならせつかく早起きしたのだ

久々に腕を振るおうではないか、とセリカはまず身支度を整えるために洗面所に向かった

髪を梳かして、顔を洗う

この時期の水は冷たく、身が引き締まる思いだな、とセリカは思った

髪も今日は機嫌がいいのかすんなりと櫛が通ってくれる

セリカの髪は意外と頑固で櫛で梳こうとすると所々で引っかかったりする

まあ朝の弱いセリカは基本自分では梳かずに雪那にやってもらっているのだが、雪那がやると不思議と引っかからないのだ

なにかコツでもあるのだろうか 今度聞いてみようかとセリカは思った

身支度が整ったのでキッチンへ

今日は何を作ろうか

「とりあえず、フレンチトーストとサラダですかね」

フレンチトーストは雪那が好きだった

セリカが作るとフワフワでじゅわつとして甘くて美味しい……
とは雪那談

付け合せにコーンのコールスローサラダでも作ろう、と考え取り掛かる

雪那の喜ぶ顔を浮かべながら、である

朝食を作り終え、そろそろ時間かな、と思い雪那を起こしに行こう
と思ったセリカはぱたぱたと寝室へと向かった

寝室に着くと、雪那は安らかに眠っていた

寝息も近付かないと気づかないほど静かで、ごく小さなものだ

仰向けで寝るその姿勢は寝るときでさえしっかりしてるように
見えて雪那らしいと思うセリカだった

とりあえず体を揺すつて起こしにかかる

「雪那、起きてください 朝ですよ」

すると雪那はすぐに反応する

ゆっくりと体を起こし、セリカの方を向いた

「んん……セリカ……？」

「はい、おはようございます雪那」

と、セリカは雪那の額に軽くキスをした

雪那はキスされた部分を触ると少し照れくさそうにし、

「ああ、おはよう」

と挨拶を返した

「今日の朝ごはんは雪那の好きなフレンチトーストですよ」

「おお、そうか 楽しみだな」

二人のなにげない一日はここから始まる

End

いい夫婦の日

「今日はいいい夫婦の日ですよ雪那ー♪」

「…だからどうした」

雪那はいつも通りの調子で返した。こういう時にセリカに乗って返すといつも引つ掻き回されるのだ。知っている。

今日は11月22日、語呂合わせでいい夫婦の日となる。

そんな日に彼女が大人しくしてる訳もなく。

「いい夫婦の日なんですから夫婦らしいことしましょうよー」

「仕事しろ」

「つれないですねー。どうせ今日はもう依頼人も来なさそうだから早めに閉めようと思ってたのに」

「それこそ働け、だ」

今日はやたらボディタッチが多いと思ったらそういうことか、と思っただけ。

わかりやすいがわかりにくい。

「文代さんの店で1杯引つ掛けていってもいいんですよ？」

ぐっ…と狼狽える雪那。

こうやって誘惑してくるのが上手いからセリカは侮れない。さすが口八丁手八丁でこの事務所を立ち上げただけはある。

口の上手さだけは超一流なのだ。

だからといって誘惑に負けてしまっただけはダメだと頭を振る雪那。

「今なら熱爛たのみほーたーい」

「ダメだちゃんと終業時間まで」

「文代さんの店今から向かえばちやうど開く頃着くから静かに呑めませよー」

「ぐっ…」

そして今に至るわけである。

「私は…ダメな女だ」

「いやあ誘ったのはボクですしダメなのはむしろボクでしょう」

はははと笑ってみせるこの女狐が今だけは憎たらしく感じてしま

う

だが憎さ余つて可愛さ100倍とはよく言ったもので、実際は連れ出してくれたことに感謝していた。雪那も実を言えば早く帰りたいかった。

いい夫婦の日なのは雪那も知っていたのだ。

だからこそこんな日くらい派手に甘えてやろうと思っていた。それが自分に出来る『夫』への『妻』としてのサービスだと思っていたからだ。

抵抗していたのはただのポーズだったわけである。

「はい、アボカドの漬けお待ち」

「すみません文代さん、開けて早々来てしまつて」

「いいのよせつちゃん。人が来ないよりはマシなもの！」

文代と呼ばれた女性はニツコリ微笑んだ。彼女はここ居酒屋一本木の女将。

1人でここを切り盛りするのは大変だろうにいつも彼女は客には笑顔しか見せない。

もつとも、その人柄の良さからこの居酒屋は繁盛しているのだろうけど。

「文代さん、ボクにはウーロンハイ貰えますか？」

「はいよっ。濃いめ？薄め？」

「濃いめをお願いします」

セリカは酒に大して強くない、むしろ下戸と呼んだ方がいいくらいである。雪那は心配した。

「大丈夫なのかセリカ」

「大丈夫ですよ。ちびちびやりますんで」

まあこういう日くらい呑みたいこともあるだろう。彼女が決めたことなのだから酒の席でこれ以上は無用のことである。

だったのだが…

「あいじょうがねーたりないんでしゅよー」

案の定である。

セリカは完全に酩酊していた。ウーロンハイ一杯飲み終えたあた

りから様子がおかしかったのだ

「だいたいね！ぼかあ毎晩毎晩抱き倒してるのに！」

「おい！」

「ボクの気持ちは1／3もつたわってないんですよー！」

どっかの歌詞で聞いた言葉だが、今はそんなことを気にしている場合ではない

「文代さん、申し訳ないですけどお冷を……」

「雪那も雪那ですよ！」

何だ急に、とセリカの方を向けば頬をふくらませていた

「キスしようとするのと逃げるし！抱きしめようとすれば引き剥がすし！腕力でボクが敵わないの知っててやってますよね！」

「だから人前で何を言うか！」

「あーもー雪那の愛が信じられなーい！」

完全に酔っ払っている これは連れ帰って早々に寝かしつけた方が良さそうだ

文代さんお会計を……と言いかけた雪那にセリカが言葉を紡ぐ

「ここでキスして」

「はあ!？」

「ちゃんと愛してるって証明してくれなきゃ帰りませんから！」

「公衆の場だぞ！」

「今お客さん僕らしかいません！」

「文代さんがいるだろうが！」

確かにピークタイムではまだないので客は確かに雪那たち二人しかいなかった

しかし問題はそこではない

人前で、キス、しかも知人の前で

こんな辱めがどこにあるというのだ

「キース♪キース♪」

「乗らないでください文代さん!？」

「いいじゃないせつちゃん 減るもんじゃあるまいし」

「色々すり減ります！私が！」

「…してくれないんですか？」

と、セリカが上目遣いで覗き込んでくる

潤んだ目、上気した頬、色気しかない

くっ、と正気を持っていかれそうになるのを必死に耐える

その時である

「隙あり！」

チュツ

正面からセリカの顔が迫ってきてあとは一瞬

キスしてしまった

「あ、ああああああ」

「へへっ奪っちゃった」

「ご馳走様ー♪」

「文代さん…」

そんなこんなでいい夫婦の日にもイチャつくのは変わらないこの

百合夫婦だった

End

雪那は駆け寄って背中を擦りながら優しい言葉をかける

「大丈夫だセリカ…もうここにはお前を虐げるものはいない…」

「うう…」

「傍には私がいる　大丈夫だ　怖いものは全て私が斬ってやるから、だからそんなに泣くな」

「せつ、な」

「うん」

「僕は、ボクは、貴女にいつも救われてばかりだ…」

ぎゅっ、と背中からセリカを雪那が抱きしめる

優しく、包み込むように

「いいんだそれで　私はお前を救いに来た側なのだから」

「ごめんなさい、雪那…」

そこで、セリカの意識は途切れた

どうやら抱きしめられて安心して眠ってしまったらしく、気がついた時にはベッドの上だった

たまにこうなる

あの虐げられ、罵られ、いたぶられ、なじられ、貶され、脅され、傷つけられていた日々の記憶が蘇って襲ってくる

それが嫌で18の時に家を逃げ出してフランスへと逃げた

それを追いかけてきたのは、幼なじみの雪那だった

あの時、覚悟していたのは捕まること、家へと連れ戻されること

そして期待していたのは、奇跡

一緒に逃げてしまおうと

結果、奇跡の方が起こり今に至るのだが、それでもあの家での傷跡は鈍く、深い

最近は落ち着いてきたと思っていたのにこれだ

多分自分は一生この傷と向き合って生きなければならぬのだらう

でも、その度に、自分を悲しみと苦しみの底から引き上げてくれる手があるから生きていられる

雪那がいるから、今をこうして生きている

優しい雪那

幼少の頃からそれは変わらず、自分を守ってくれる
彼女に出逢えたのが、あの家での唯一の救いであり奇跡
そんな奇跡を

「目が覚めたか」

「はい、ご迷惑をお掛けしてすみませんね、雪那」

「何、私たちの仲だ、慣れているさ…っ?」

今はぎゅっと、抱きしめる

e n d

キスの日 2019ver

5月22日 さて、今日は何の日でしょう
そう

「キスの日、か…」

雪那はいつも通りのゴシップ紙を傾けて呟いた
そう、今日はキスの日である

普段からちゅっちゅちゅちゅちゅちゅしてるところからありがたみが無い、と思
いがちだがこういうイベント事にはきっちりしてるのが雪那
だからこそこの日は特別にしたい！と願うのだった

しかしそんな願いは何処いく風といったのがこの女、セリカ

「雪那、今日の仕事の予定は」

「2件、引越しと子守りだな」

「じゃあ二人で行きましょうか その方が効率いいですし」
「そうだな」

1件目、引越しはセリカの手伝いもあつてか早めに終わり、昼食を
挟むことにした

「どの店にしましょうか…」

「折角だから重めに食べたい気分だな」

力仕事の後だからな、と付け加えて雪那

「雪那はいいですねー太る心配がなくなつて」

と、むくれるセリカ

「デスクワーカーには辛いな」

「頭脳労働が僕にしか向いてないからですよー」

さて、どこに行くかとき迷い結局雪那のお気に入り蕎麦屋『繚乱
堂』で食べることに

席につき、メニューを見る2人

とりあえず、いつもの、ということ

「きつねそば、冷で」

「たぬきそば、温で あとカツ丼も1つ」

「承りましたと」

ウェイターの紀子（のりこ）が飄々とした様子で注文を取っていった

「おやつさーん、セリ雪ランチーっ！ー！」

「あいよ！セリ雪ランチーっ！ー！」

「その言い方はやめろ！」

紀子と店主晃（あきら）の会話に雪那が割り込む

「えーいいじゃないですかセリ雪ランチ、ボクは好きですよ？」

「そういう問題じゃなくてだな…！」

まるで、と口にしたところで

「夫婦みたい？」

「それだそれ」

「ち！が！う！」

「えー夫婦と何が違うんですか雪那ー」

「それは！だな…うん…！」

「言葉に詰まる辺りまだまだだなせっちゃん」

と、晃が茶化してくると雪那は真っ赤になって

「晃さん！」

と反論する かわいい（セリカ談）

「セリちゃんに振り回されてるあたり尻に敷かれてるのは変わんねえよ、ほれランチいっちょよ上がり」

「あ、どうも」

「むう…！」

受け取ると2人は丁寧に両手を合わせて

「いただきます」

と挨拶

これは育ちの良さが見える

その後食事を普通に終えて、店を出、以来の時間までフラフラするかと思つたところでセリカに手を引かれた

「雪那、こっちこっち」

「こっちこっち…！」

路地裏じゃないか、と言おうとしたのもつかの間どんどん連れてか

れる

どこにそんな腕力があるのか体重差のある雪那をグイグイとひっぱって路地裏に入るとセリカはいきなり雪那に口付けた

「んんっ…」

「んは…」

拒み気味の雪那の唇に舌をねじ込み強引に開かせると、舌を絡めるとそのまま口内をねぶり味わい、

「っふ…っ」

「んっ」

ゆっくりと蕩けさせていく

「雪那、やっぱりカツ丼に七味めっちゃかけるのやめた方がいいですよ 口の中辛い」

「外だぞー!」

「スリリングな方が思い出に残るでしょう?」

悪戯っぽく笑うとセリカは雪那の唇を指で指し

「今日はキスの日でもありラブレターの日でもありますよね?」

後者は初耳だった

「ルージユのラブレター、受け取ってくださいね♪」

「な、や、な」

「ふふふ、雪那ったら全部顔に出てるんですもん ロマンあるキスしてやるって目が語ってる」

「私はな!」

「言わなくてもわかりますって」

セリカは再び悪戯っぽく笑うと

「お返事は帰ってから、ね?」

と、言って歩き出した

「…覚悟しておけよ」

と言ってその後を歩く

こんな2人のキスの日

End

恋人の日

「今日は恋人の日、かあ」

6月12日、セリカがカレンダーを見てつぶやく
記念日というのは1年にあまりにも多くって

それをいちいち気にしていたらキリがなくなつて
でも気にしてしまうのが性分で

「(なんか意識しちやいますよね)」

調べてみればカップル同士で写真立てを送り合う日だとか単にイ
チャイチャする日だとか色々な説が出てくる

だからこそセリカも雪那とイチャイチャしたい、と思うのだが…
しゃーりしゃーり：

雪那は趣味の包丁の手入れをしていてそれどころではない

雪那の刃物好きは本当凄いいもので愛刀の手入れはもちろん買った
包丁は月一で刃を研ぐ

たまたま今日がその日だったのだ

ちなみに今近づく、「私に近づくな!」と怒られる(刃物を扱って
いるので危ないため)

「(あと一二時間はかかるかな…)」

こうやって没頭し始めた雪那を止める手だてはない
ただひたすら待つしかないのだ

そう待つしか…

「…リカ」

「ん…」

「セリカ」

「せつ、な?」

揺り起こされるセリカ

「眠っていたぞ 風邪をひくぞソファで寝ては」

「ああ、寝落ちちゃいましたか あまりにも暇だったもので」
ちよつと皮肉を混ぜてみる 反抗の意志を込めて

そうすると雪那は少し申し訳なさそうな顔をして

「すまん、つい没頭してしまつた ああなると周りが見えなくなつてな…」

「いいですよ ボクの珈琲作りと同じでしょう」

本当はわかつてる お互いの趣味は尊重しなければと

でも恋人の日なんだし、構つてくれてもいいじゃないか

という僅かな期待を込めて雪那をみつめる

すると

ちゅっ

「んっ」

雪那がセリカに優しく口付けた

「なんです急に」

「お前だつていつも急だろう」

「そんな僕が年中ちゅっちゅしてるみたいな…してますね」

「だろう」

しかし何故、と問うと

「してほしそうに見えたからだ」

と、心の底を見透かされたような答えが返つてきた

ずるい、と思つた

雪那はセリカが欲しいと思つた時に欲しいと思つた行動や言葉をくれる

いつもそれに甘えてばかりだ

でも

「主導権握られっぱなしって性に合わないんですよねえ」

「なら反撃するか？いつでも受け付けるぞ？」

「上等」

雪那の腕をぐいと引つ張りソファに押し倒す

その上に覆い被さるセリカ

「昼間からか？」

「嫌とは言わせませんよ？火をつけたのは貴方だ」

「ふん…仕方ない 発情している牝犬の相手くらいはしてやるか」

「いつもは自分がそうなるくせに」

「うるさい」

なんだかんだでイチヤイチヤする2人

そうやって流れていく、2人の恋人の日

End

気の済むまでキスして

「んっ…」

「んむっ…」

唇を重ねて、お互いの温度を確かめ合う

そんな行為が当たり前になって何年経つだろうか

そんなことも考えていたこともある

でもそれはあつという間にセリカに思考ごと溶かされて、何もわからないようにされて

そうやって溶かされた中身をセリカで満たして、その繰り返し

「セ、リカ…」

「雪那…」

一度離れるも再び重なる唇

今度はお互いに舌を絡め合わせて、相手を求め合うように、濃厚なキスを交わす

「ん…ふあ…んっ」

「んんっ、あ…んむ…」

力が抜けそうになった雪那はセリカの背中に腕を回しにぎゅっと抱きつく

セリカはそんな雪那の腰を優しく抱き寄せ、キスを続ける

「んあ…ふっ…んん」

「はあ…ん…ん」

どちらの嬌声なのかわからなくなってくる

混ざりあって1つになるとはこんな感じなのだろう

幸せな感覚 多幸福感に溢れ、心が、体が、喜んでるのがわかる

これが、今の自分の幸せ

そう思うと、あの時セリカの手を取ったのは間違いではなかったのだと思う

フランスのとある小さな協会

そこの礼拝堂でセリカと雪那は対峙していた

雪那の家から逃げたセリカを追ってここまで到ったのだ

「追っ手が貴女とは…母様達も相当意地が悪いと見える」

やれやれ、と言った表情で笑うセリカに雪那は語りかける

「大人しく家に帰れセリカ 今ならまだ間に合う 私も掛け合ってるか…」

「お断りします 籠の小鳥にはもう飽きました ぼくはもつと自由を謳歌したい」

雪那の言葉を遮るセリカ

その言葉にはハッキリとした意思が見えた

セリカの本家での扱いは幼い頃からセリカと共に生きて雪那も知っていた

幼い頃から厳しく躰られ、時には虐待とも思える仕打ちを受けてきた そんなセリカが機を見て逃げ出すのは明白だった

だが、それでも自分は、雪那は水無月家の剣

命に逆らうわけにはいかない なんとしてもセリカを水無月本家へ連れ帰らなくてはならない

しかし、セリカを返せばまたひどい仕打ちを受けるのだろう

1度逃げたのだ なら次は逃げようとする意思すら奪うほど苛烈な責め苦を味わうことになるだろう

そんな所にセリカを…と考えると迷いが生まれる

そう悩んでいるところにセリカから声をかけてきた

「雪那」

「なんだ」

「今この場にはボク達2人だけです…本音が聞きたい」

本音…本音を言うならセリカを手助けしたい

セリカと共に逃げたい

しかしそれは水無月、如月、両家を裏切る行為だ

それだけは…

「私は…」

「ボクは、貴女と生きたい」

ハッキリと言葉にするセリカ

自分もそれだけハッキリ言えば…

「雪那、2人で逃げましょう？ ボク達2人でなら、どこにだって行ける、どこでだって生きていける」

「私は…」

「ボクは『如月雪那』には聞いてません ただの幼馴染の『雪那』に聞いています」

幼馴染の、雪那

誰よりもセリカを知り、誰よりもセリカの幸せを願う雪那の思いは「私は——『聖理香』お前と生きたい」

「なら、この手を取って——僕をさらってください」

「ああ、頂いていくよ」

そうして雪那はセリカと共に逃げ続け、ある日セリカの祖母の聖から手紙を受け取り、日本に戻り、今に至る

「雪那、考え事ですか？」

「何故、そう思った？」

「眉間のシワ、寄ってます」

それは気づかなかった、と雪那

それと同時にふっと笑って

「私が何も考えられないくらい、キスしてくれ」

とセリカにねだった

「難しい注文ですねえ…応えますけどね」

と、セリカは笑って雪那に再び口付けるのだった

End